

---

# ロリショタ！ ~私立萌葱学園萌えルート~

白代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロリショタ！～私立萌葱学園萌えルート～

### 【Zコード】

N4779F

### 【作者名】

白代

### 【あらすじ】

サイトにてリメイク版公開中です  
【<http://07di.e-biolog93.fc2.com/>】

## プロローグ（前書き）

はじめまして。空蝉 うつせみ 彼方 かなた と申します。一応女です（笑）。此処のサイトではまだ解らない事が多々あります……ですがそれなりに頑張ってみようかと思います。

## プロローグ

これは、二人のカップルを守る俺の話。  
故に、カップルの話ではないのが残念は人は残念だなーと思うだ  
ろう。……だが。

そんな二人を見ているだけでも楽しいし、そんな一人からの使命  
を受けたのもこの世界で俺一人だけなんだ。ロリショタ、ロリショ  
タ。

ロリとショタの二人を絶対に良い方向にもつていき、確実なデー  
トプランとムードを設計するのも世界でたつた一人。この俺だ。  
目を離すと危険なロリガールとショタボーアイが俺の元から独立す  
る日は一体来るのだろうか……？

ロリショタ。

これは、二人のロリショタラブラブカップルプラス平凡男子高校  
生の、明るくて少し有り得ないような、でも楽しい話という事にな  
る。

「こいつら、いつ自立すんのかな」

NEXT

……ストーブは、温かいなあ……。

そんな事を思わせる、誰にでも訪れる肌寒い冬の最中に、俺は温かいストーブの前に居た。

寒いくせに中にいれば温かいと思わせてしまう今の時代が少し怖くなつてくるくらいにこの教室のストーブは温かい。

イヤな事も勉強も、試験勉強も何もかもを捨てて良い心になつた気分だ。

ふう、とため息をついて俺はストーブの前に手をかざす。イヤな事。そうだなあ、俺のイヤな事といつか少し鬱になるような原因といえば、『この一人』かもしぬれない。

「アオ。邪魔だ。温かい風が俺にだけ来ないぞ」

「ごめんねえ、蒼くん」

「…………」

甲高い声が「蒼」「蒼くん」などと呼ぶ。

俺の名前は蒼と書いて「そう」と読む。だが仲の良い奴だつたり、そうだ。後ろにいるちつこい男子は俺の事をアオと呼ぶ。そんでもつてちつこい女子は俺の事をちゃんと蒼くんと実名で呼んでくれる。俺はその一人の要望通りにヨツコイショと温かくなつた体を持ち上げて、立つた。

途端に目に写つたのは、一人の姿。

男子のほうは、大神亞夕といつ。ちなみにあゆうと読む。亞夕のあだなはアコ。本人は嫌がつてゐるのだが、俺は亞夕と呼んでいる。容姿を簡単に説明しよう。背は、俺よりも断然小さい。並んだら亞夕は俺の肩くらいかな。髪は短くて、しつかりとしている。制服の着こなしもしつかりて正しいのだが、亞夕が小さいばかりに説明はダボダボだつた。そして何より、この童顔。高校生とは思えないくらいに可愛らしい顔立ちをしているのだが、大人びていて生意気

そうな表情。実際、生意気なのが。

もう一人の少女……いや、女子は水上白亜という。みずかみ、はくあ。皆からはハクちゃんだの、ハクにやをだの呼ばれている。俺と亜夕は普通に白亜。

「コイツもまた容姿がある意味問題なのだ。

背は、亜夕より小さい。そして、細い髪を高い所で二つに結つている。ツインテールって言うのかな。そして、亜夕同様この童顔。可愛らしくてまだ小学生の雰囲気がある。可愛い事この上ない。制服は？と聞かれると誰もがこう言うだろう。「袖が……」と。ブレザーはデカいのか、袖はブラブラしていた。スカートは何回か折っている。巻いているって言うのか？

二人ともとても可愛い。そんな可愛い二人を、一部世間ではこう言つだらう。

『ロリとシヨタ』と。

## 早速始動の強攻突破

ロリとショタ。

これこそ正にストライクゾーン！ と考える奴はこの世に沢山いると思う。いや、沢山いる。

そんな萌えストライクな可愛らしさ一人に俺はときめいた事なんてない。『ドキン』もなければ『ドキュン』もない。強いて言えば、普通に可愛いカッフルだなーって事くらいかな。誰もがこの二人を見て可愛いと思うだろう。

さすがに一目惚れとか萌えストライクなんてのはないが、可愛いとは誰でも思うと思う。感情がしつかりした奴ならな。ま、可愛いだろう。

そん一人のお守り役が俺なワケで、外出する一人の後ろにガードマンのようなストーカーのような状態でついていく俺なのだが、やはり一人は校内を歩いてみても目立つ。狭い廊下の中でもとても目立つのだ。

女子の先輩方なんかは亜夕にベタ惚れ。隠れファンクラブってのが校長や職員達に内緒で作られているらしい。参加費は無料。

白亜は男子にも人気だ。男子なんかは写真部から彼女の写真を撮つてもらつたりしている。勿論彼女本人の許可ありで。白亜は「白亜もモデルさんだねー」と嫌がつている様子は全く見せず、悠々とフラッシュを浴びている。

ファンクラブもできているらしい。なんでも、『白亜ちゃん愛で同盟』とか。亜夕は、『ショタ亜夕くんを愛でる会』とか。プラスチック製会員カードを今なら無料らしい。勿論入会した人には、だ。

そんな事、亜夕は全く興味なさそうなのだが。白亜はちょっとびり嬉しそうな照れくさいような仕草を以前見せていた。

「……腹が減ったなあ。そろそろパンとか買いに行かない、昼飯

の時間だ」

「由里、アコと一緒に食べるのー」

「じゃあ一人とも、下行つて何か買いに行きますか？」

賛成賛成賛成ー！白糸ねえ、ケリームバンケリームバン！」

卷之三

17

白皿はい「も亜夕と一緒に物が食べたい」といへり「もしも亜夕が買った物を食べている。

昨日確か亜夕はメロンパンで、白亜もメロンパンだったたわけ。俺はちなみに二人と全然違うサンドイッチだった。野菜が豊富に使われた、健康に良さそうなサンドイッチ。

白亜も亜夕も温かいストーブの前から立ち上がり、一人揃つて廊下にでる。

そのチンマリとした一人に付いていく、一人に比べたらデカいのが俺。

からうじて一階の食堂についた。

二人はやはり背が小さいので、階段を上り下りするのも多少疲れてしまつらしい。

だがそれでも楽しく会話して階段を降りていった。

の食堂。ガラス張りといつてもいいほどに解放感あり、差し込む太陽の光は柔らかい。……雨天だったらこの食堂は美しく見えないのだが。でも、食堂は綺麗だ。

だが。今日は何故かザワザワとした空気が押し込んでいた。

る。

確か。……確か今日は、奇数の月の木曜日だ。という事は、生徒達からとても人気なメロンパンが売っている特別な日である。

そのメロンパンというのは奇数の月の木曜日の、食堂のおばさん太達が期限の良い時だけ作られるという伝説のメロンパン。

そのメロンパンというのがこれもまた味が最高で、濃厚なメロンの味が際立ち生徒を虜にするという。そんなメロンパン俺も食べてみたいものだ。

そんなパンを求め、生徒達が欲しい欲しいと一点に集まり、ギュウギュウと激しいメロンパンの争いが続いている。

「いいなー。白亜もあのメロンパン食べてみたい」

「実を言つと、オレも」

白亜と亜夕がグゥウとお腹を鳴らさせて、メロンパンを求める野獸達を見ながら呟いた。

「俺も食べたいけど、もう……あの大群じゃ無理だ」

白亜は指を加えて野獸達の光景を見ている。高い所で結われたツインテールが僅かに揺れた。まるで、俺に「取りにいけ」とでも言つてゐるかのような微妙な動作。

無理に決まってる。あんな野獸達の大群に攻めたら怪我するぞ！ それにもうきっとメロンパンは残り少ない。

「アオ。お前の指名、忘れていないよな？」

「……は？ む、無茶言つな！ メロンパンは残り少な……」

「いいからさっさと行つて伝説のメロンパンを二つ持つて来い！ 命令！」

「お、俺のおじり？！ しかも二つ持つて？！」

亜夕に背中をドンと力強く押された。ショタが出すような力とは思えないくらいの馬鹿力のせいで俺は大群に飛ぶように入つて行つてしまつた。

「う、うわああああああああああああつ？！」

入るとそこはパラダイス！ ではなく、本当に地獄だ。

周りは先輩が多くて、一年の俺はヘコヘコしなければいけない気分。それに何よりこの人の多さ！ 押しつぶされて死んでしまわなければとも心配だ。



## 俺の暴走・メロンパン

「ううう……人に押しつぶされて、し、し、しし、死ぬ……。

死ぬだろ！」「コレ！

亜夕の奴は自分と白亜の事しか考えてない。押しつぶされるように命令しやがって。まあ、メロンパンを取つてこいアンド買ってこいというのが命令なのだが。この仕打ちは酷すぎで俺の息は既にゼエエしている。

「覚えてろよ、ガキ！」と思いつつ潰されながら手を伸ばして辛うじて歩き続けると、やつと人混みのど真ん中に入り込めたらしい。そのせいが、周りはうるさい。

金切り声をあげて皆必死でメロンパンを奪い合つていた。

くそ、こんな状態の中からメロンパンを二つ取るのか。

あれ、二つ？ そういえば亜夕はメロンパンを二つ取つてこいと言つていた。…… そうか、アイツは俺の事も考えない憎らしい酷い奴なのか。

白亜と亜夕のメロンパンで必死だったのか、自分の分をいつの間にか忘れていたのだ。

仕方がない。俺は普通のパンで我慢するか。

目の前のメロンパンやパンが置かれている台を見ると、残りのメロンパンは後三つ。

皆人混みで奪い合つているからメロンパンも取りにくい状況に置かれているのだ。だから単独でしかも絶好のポイントというド真ん中に居る俺は、ここから暴れて大ジャンプでもしてみればお目当てのメロンパン二つ取れる可能性大有りなのだ。

蒼よ。大ジャンプする用意はいいか？ …… オーケー。

脳裏でもう一人の自分が返答しているような気がして、俺は大ジャンプしてメロンパンを一気に二つ取つてしまおうとこう世にもくだらない作戦を実行しようとする。

運動神経というものが何故か優れているという俺にはあんな距離までのジャンプ朝飯前なんだよ。

足を踏み出して。

一。

二 いの。

三。

一瞬この世界がいつまでも止まっているような気がしたが、すぐに時の経過は開始し俺は見事に人々の横を横切つてジャンプしていた。

そのジャンプの影響で髪がフワフワサラサラと揺れている。時間が進むのが……遅い。

俺はスロー最盛されている映像のような気分に取り囲まれ、徐々に近づいてきた台の上のメロンパンに大きく手を飛ばした。

届け。届け。届け！ そう思った刹那。

時間の進み具合がいつものスピードに一気に変わり、俺はメロンパンを一つ掴むと同時にズザアアアアアと大きく音をたててメロンパンの台に見事着地した！

「取った。取った！ やつたぜ、亜夕、白亜！」と思いつつ周りの元々居た人だから見ると、皆視線は冷たい氷のように俺に向けられていた。

いや、ね？ セめて拍手でいいですよね？

まあそれはさておき取ったメロンパンを誇らしげに見つめて抱きかかるようにしてメロンパンを持ち、台をスッと降りて亜夕と白亜の元へ行こうとした。

「亜夕！ 白亜！」

俺は満面の笑みで一人を見た。

が。

チンマリとした二人とは対照的にデカい先輩たちが一人を囲んで、

「亜夕くん可愛いねー。」のメロンパン、お姉さん達があげちゃうよつ

「は、白亜たん可愛いなあ。俺達の分もタダあげるよ……。」

なんだ。この光景は。

囮まれて、二人はそれぞれ二つずつメロンパンをもらい、俺同様そのパンを抱えていた。白亜は嬉しそうに、亜夕は少しシンデレっぽく「べ、別に欲しいなんか言ってないんだからなー」なんて言つてみたり。

二人の為に満面の笑みが一気に固まって心の中に悲しさがしきりになるのがよおーくわかつた。

あ、あははは……はははは……。

「アオ、すまない。二つも貰つてしまつた。もうそのメロンパンはお前にやるからとつと金払つて……」

「じめんねえ、蒼くん」

「へへへへへへ、いいよ、もつ……」

メロンパン一つで一百円といつじの高や。メロンパン二つイコール合計四百円。チャリーン。……トホホ。頑張つてジャンプして、ほほ命かけてた俺がバカだつたよ。

四百円は無駄に消えていった。

それにして、じのデかいメロンパン一人で二つも食つのかよ、俺。

「うわあい！ じのメロンパン大きいねー」

白亜がデかいメロンパンのビニールを開けながらそう言つた。

その白亜の動作に続いて亜夕もビニールをビリビリと開け、無表情で少しメロンパンを見て嬉しそうにしている。

俺の頑張つた意味、なし。

「まあ、オレは別に欲しくないと言つたのに周りの女どもがメロンパンをやるやるって。だから仕方なくもらつてやつただけだぞ。悪

く思つた

「もうその話は終わりにしようってかんじなんですけど……」

すると白亜が空氣を読まずに、

「あああーっ！ アユのメロンパンのほうが大きい。 交換して、交換

「しようがないなあ白亜は。 ほら」

この話は終わりにしようと言つたのは俺だが、呆氣なく無視しているかのように相手にメロンパンを交換をし始める亜夕を見るとなすがに心が痛い。

それにしても久しぶりにあんなジャンプしたような気がするぞ。 最近体育の授業以外運動していないからな。 少しは今日みたいな日 に備えて運動するとか、な。

亜夕の白亜の変な願望によつてまた頑張る日が来るかもしないし、体がなまつているなんてのは高校一年生の男子として恥ずかしい事だ。

チツコイ亜夕と白亜が大きなメロンパンにかぶりついているのは 可愛いなあと思つた。

この見た目が幼い二人のカップルを見てると癒される。 フウと幸せなため息が出そうな程なのだ。 幸せなため息つてどんなのかわかるよな？

メロンパンを食べる気力もない俺の目を確實に背けて白亜のもう 1つを向きながら、亜夕はモグモグと口を可愛らしく動かせて言つた。

「白亜。 今日のデートの事だけど、生徒会があるから……」

田の前でデートの話をされる事なんか慣れました。

ところで、亜夕は生徒会に入つていて。 さすがに生徒会長ではないのだが、やはり周りの大勢の生徒から「ちびっ子生徒会」として 人気を集めていた。 これが、亜夕は男子も女子にも人気があるものだから恐ろしい。

「ええ、生徒会？！ ウソ、だつてこのあいだ白亜がデートしたい つて言つたら放課後デートつて言つたのアユだもん！」

「生徒会の仕事は生徒会の仕事だ」

「ごめん。意味がわからない。」

「アユのバカア！ 生徒会のバカああ！」

「と、とりあえず一人共。口に物を入れている時は喋っちゃいけませ、」

「蒼くんは黙つてて」

「は、はい……」

いつも笑顔の少女に突然、ギロリと睨まれたら黙つていいしかない。この気持ち、理解できる奴は多いはずだ。

そこでハツと氣づく。

もしやコレは、絶対あつてはいけないカツプル喧嘩？！

そう思つていると亞夕が隣で食べかけのメロンパンをビニールに入れて、

「行くぞ」

「……」

亞夕はそのビニールを持ちながら教室に行く為の廊下に出始めた。そんな彼を見て白亜もビニールに食べかけのメロンパンを入れ、俺に無理矢理持たせる。一人共残りの一個は明日食べるつもりだろうか。

すると白亜が俺を上目遣いで見てきた。

「は、白亜？」

「お願い。蒼くんは私達のためにいるんでしょう？ 協力してえ？」

「む、むう」

「お願いお願い！」

上目遣いで可愛らしい視線を送られ、しかもおねだりされたら俺

だつてかなわない。

「わ、わかったよ……それが使命だからな」

そう言つてやると、白亜は嬉しそうににっこりと微笑んでツインテールをピヨンピヨンさせながら寒い廊下を先に駆けて行つた。短めのスカートもピヨンピヨン揺れる。

協力してと言われても何すりやいいんだ？

## 最強カツプルの最強喧嘩

食事の後、授業は終了したので俺は帰りの学活の前に先生の指示通り通学用バックに重たい教科書らを押し込み、担任の先生から明日の持ち物などを聞きつつ連絡用ノートにそれらを書き込んでいった。

『協力して?』 というさつきの白亜の台詞がまだ頭から離れない。乾ききったボンドのように剥がれない代物となつていて。

協力してなんて言われても、今日亜夕の奴は生徒会の仕事があるんだ。いくらなんでもデーートしたいからつて無理に決まつてるぞ。……まあ、このチビカツプルを良い方向に持つていくのが俺の役目だけだ。さすがに無理だ。

白亜と亜夕のデーートはどうなるのか。そして、一人の喧嘩らしい物の行方は? ついつい気になつてしまふと後ろの席のほうを向いた。

ちなみに俺は黒板とこつなチョークのカスで汚れた物のど真ん中に居るわけで、白亜と亜夕は一番後ろの席だから首を曲げるのが痛い。

それはさておき。

ツインテールのオチビさん、白亜はムスー<sup>チ</sup>したしかめつ面で帰りの学活用のノートに何か落書きをしていた。自分のイライラを学活のノートにぶつけているがために落書きをしているのだろう。一方亜夕は何食わぬ顔、……何食わぬ童顔で普通にダラダラと学活のノートに先生の言われた事を書いていた。さすが生徒会所属。しっかりビッチリ書き込んでいるな。

こつもの一人の帰りの学活はこのような物だつた。

まず、白亜が亜夕にウインク。そして亜夕は照れる。まあ一部世間で言うツインデレ仕草を見せる。その次、白亜が何かパントマイムで亜夕と話をする。亜夕もそれに便乗してパントマイムで話す。

……と、担任が来て怒られるつてわけだな。

ちなみに白亜と亜夕は一番後ろの列の席で、亜夕の右に別の生徒がいてその生徒の隣に白亜がいる。またまたちなみに白亜はベストポジションとも言えよう。窓側にいる。

というわけで、今日は一人のパントマイムはなかつたし、今くらいの時間帯ならそろそろ担任から拳骨をくらつてもいい時間だつたが、今日は一人とも顔を合わせる事なく帰りの学活をスルーするかのように終了した。

この二人、本当に大丈夫なのだろうか。

まあ、「大丈夫か?」と思いつめるのなら俺は一人の為に全てを尽くさなければいけない。食事の時間に消えてしまつた二人の放課後デートを復活させてみようじゃないか。亜夕だつて、デートしたい筈だ。「中野くん。中野くん。先生のお話聞いていたかな?」

女性担任の駒形先生の高い声が耳に響いた。

「あ、すみません」

謝つてはいたものの明日の持ち物や連絡より亜夕と白亜の放課後デートのほうが大切だつたし、何より最高のデートプランをたてなければいけない。今は明日の事より今日の事。もっと詳しく言えば今日の放課後の事が大切なのだ。

学活用に何か書き込んだフリをしてから、頭の中でデートプランを必死に考えた。

だが。

ああ、そうか。今更気づいたぞ。

恋愛経験が全くの無と言えるこの俺がいくら必死こいて一人の最高の放課後デートを作り上げてやるうと思っても、無理な話なのだ。

女子に興味が全くない俺が女の子などのような物が喜ぶかなんてわからないし女子の気持ちになんてなれない。むしろ彼女を持つ彼氏の気持ちなんて味わつた事も深く考えた事もない。それはさておきこのチビカツプルの好む物、好むデートなんて解らない。

何度か一人はデートをしているが、俺はデートについて協力した

事が一切なかつた。協力といえばジュークやクレープを全て俺の腹で買つてやつたという事くらいだけだらうか。

何故デートプランをたてた事がなかつたかというと、亜夕は俺の恋愛経験の無さを知つていたから最初からデートプランについては俺に任せなかつたのだ。

亜夕はやはりそのショタルックスショタといつ属性でモテているため、デーパラントなんて朝飯前なのだ。……じゃあ俺は？ どうすんの？

「…………」

すまん白亜。その放課後デート、たつた今また消滅したかもしない。

先生から清掃なしの連絡と帰宅許可をもらつた後、亜夕は鞄片手に生徒会議室へと向かつてしまつた。白亜への挨拶なしで。

やはり亜夕も少し悔しかつたのかな。約束した事を守れなかつたのが悔しかつたのかあるいは男として恥ずかしかつたのか。まあ俺としての意見では生徒会なら仕方ないかな、と。

だがやはり白亜は女子なのでそんな理由通用しないのだ。女つて奴はわがまだなあ。

「あ、蒼くん。一緒に帰ろ?」

「おお」

そんな思考を脳いつぱいに広げている氣分でいるが、白亜がひまわりのよつな満面の笑みでそう言つてきた。彼女は背が小さいために、俺はいつも見下ろして返事をするのだ。

白亜は相変わらず可愛らしい明るい笑顔を見せてくれていたのだが、裏には少し悲しそうな表情もある気がした。

白亜が、夕焼けになりかてた空の下をピョ ピョ ピョ ピョ と歩く。それと隣に付きそうように俺も歩いた。亜夕なしの俺達での帰宅は久しぶりかもしれない。

白亜がツインテールを揺らしてつぶらな瞳で俺を見て、  
「あのね、白亜ね。本当はちょっと反省してるの」

「……そうなのか」

「うん。だつてアコが生徒会のお仕事があるのは仕方がないのに白亜はアユにバカって言つちゃつて。コレって、白亜のお馬鹿なワガママだよね。白亜のワガママのせいだアコを怒らせちゃつたし。ほんと、白亜ってバカ。バカ。バカ、バカバカ！」

ああ、やはり反省しているのか。と思い白亜の小柄な体を見下ろすと白亜の瞳がキラリと光つた気がした。光つたと思うが早いがその黒真珠のような大きな瞳は少し歪み、ポロポロと透明な雫が乾いた地面につたつた。

「もう……ヤダヤダ。白亜はどつせバカだもん。ふえ、ええええええええええええええええええっ！」

とうとう大声をあげて泣き出してしまつた。誰か白亜を止めてくれ。

「は、白亜！ やつぱり学校の門へ戻ろつ！」

なんでこんな事を思つたんだ、俺。

この俺も予想外だつた台詞を聞き、驚いたように口を少しポカンと開けて白亜は涙を止めた。

後、更に俺の脳裏に浮かんだ覚えのない行動をした。……気付いたら白亜の細くて腕を掴んで来た道を逆戻りし、学校へ向かつていたのだ。

嗚呼、神よ。こんな俺に幸あれ。

「蒼くん！？ どうしたの……？！」

ツインテールをピョ ピョ ピョ ピョ 摺りさせて意味不明の行動をする俺に白亜は頑張つてついてくる。

## 仲直りすれば一人の父親

亞夕を待つ為に、俺達は門の前でたたずむ事にした。

まあ、何故俺がこのような行動をしたのかも解らないでいるし、俺は一体この未知の頭脳の中で何を考えてからこの行動に走ったのか解らない。

人間は、全くの未知です。

でも恐らく俺のさつきの行動は白亞の為の行動だろうと多少は考える事ができる。

白亞はそれなりに自分のワガママさを反省してはしていたし、きっと彼女は自分の彼氏であるショタ亞夕に謝りたいと思っているかもしだれないし。だから俺は自分の使命的ミッション的運命を辿る為に白亞の為に走ったのだ。

もちろん、亞夕の為もある。

亞夕だって反省しているかもしない。……まあ男の俺から言わせてもらうのならぶつちやけ亞夕に反省すべき所は無いのだが、ちゃんと対応を取るべきだったとか、謝るべきだったとかは思つてはいるだろう。……多分、な。強いていえば、この喧嘩らしい状態は二人の幼さが故に起きた状態なのかもしない。

体や年が俺と同じ大人に近い時だとしても、二人は自分達の見た目やその童顔のようにまだまだ子供なのだ。まったく放つておけないよな。

でも、俺にとつてみればそんなところが二人の可愛いところなのだろうか。

周りの言つ『ロリ』『ショタ』とか、外見にとらわれた見方ではなく俺はまだまだ心の面でも未熟で幼い二人が好きだ。一人と一緒に居るととても楽しいし、あきた日なんてないのかも。 亞夕は意地悪ながらも俺に接してくれたし、同じ年なのに背が断然デカくて力もある俺を信用してくれた。人気者のくせにたまにに人見知りす

る白亜は自分よりもデカくて強そうなかんじの俺を慕ってくれ、仲良くしてくれた。

そんな二人だから。

だから俺は亜夕と白亜から受けた『使命』を果たしたい。

そんな一人がドンドン悪い方向に行くなんてたとえ神が許そそうとも俺が許さねーよ。一人が喧嘩するとか、別れるって事になるのも俺は見過ごせない。一人を守り、一人の幸せな姿をいつまでも永遠に見ていたいというのが俺の強い願望。

……ただこの願望には欠点があり、それは何かと言つと「一人に一直線になると『自分は恋愛経験なしのまま』という事だった。

「…………

無言になり心の中で微かに苦笑。

「ごめん。一人がどうだろうとさすがに彼女または妻ができないのはちょっと、な。

「蒼くん。アユ、来るかなあ？」

少し寂しそうに白亜が聞いてきた。僅かに首を傾げ、つぶらな瞳は俺に向けられていく。一つの長いしつぽのよう見えるツインテールが揺れた。

否定はしない。可愛い。「来ない事なんてないだろ。学校に泊まるわけじゃないんだから。亜夕のはたかが生徒会だろ？ あまり心配しなくてもいいよ。ただ、今日は少し長引いているのがもな」

時計を見ると、いつもの生徒会が終わる時間を過ぎていた。もうすぐで五時半になる。

冬は日が沈むのが早いためにもうすぐで真つ暗になりそうなかんじ。夕日は沈んで夜空へ移り変わる狭間に俺達はいるのかもしれない。その微妙な夕日のオレンジ色の光は、白亜の白くて可愛らしい顔を少しオレンジ色に染めた。うん、絵になつているぞ。

しばらく白亜の横顔を上から見下ろすようにして見ていると、後ろから何やらやけにチッコい人影が見えた。……亜夕だ。

「あ、アユ！」

白亜が亜夕に向かつてそう言つと、亜夕は少し照れたように頬を赤く染め、ブイツと後ろにまた向き直してしまつた。なんせ亜夕が子供っぽく見えるわけだから、その仕草は可愛らしい。

そんなシンデレ亜夕に向かつてテトテトと白亜は歩き、「ごめんなさい、アコ。白亜、ワガママ言つちやつて怒らせて。生徒会なら仕方ないよね？ それなのに白亜つたら……本当にごめんなさい」

両手を前で重ねて頭を下げる白亜を見て亜夕は動搖する。人差し指をたてて照れくさそうに頬を搔いてから亜夕も反省したように首を下に傾けて頭を下げる白亜を見た。珍しく白亜は真剣だ。

亜をギュッと瞑つて顔を赤くし、頭を下げ続ける白亜。

すると、「うん。オレも悪かつたよ。実を言つと生徒会が終わつてから帰ろうとして此処に来たら、お前達が居てた。それでしばらく此処でお前達の様子を見てたんだ」

ストーカーかよ。ていうかよく気配消せたな。

白亜はソレを聞くと頭をフイッと上げた。

「いつから見てたんだ？」

「……ああ、『蒼くん、アコ、来るかなあ？』らへんかな。ごめん、オレもごめんっ！ 白亜との約束生徒会で潰れちやつて少し悔しくて。……ごめんね」

おお、コイツも珍しく謝つているじゃないか。

亜夕は照れくさうに微笑んで、白亜の小さな冷たい手をとつた。白亜も顔を赤らめる。

「……じゃあ、そうだな。一人共。今日は帰宅データつー事で、どうすか？」 そう言つと、一人は揃つて、

「うん。」「もつ本当の子供だな。

すっかり黒くなつたような、まだ赤い夕日の色が混じつたような  
そんな色に変えられたようないつもの下り坂を歩きでくだつていく。  
この坂は登校する時は登り坂という地獄に変化するが、帰りはラク  
チンだ。スルスルと下りれる。

そんな坂を一人は仲良く手を繋いで下り、その一人の後ろを俺が  
ついていくという形だ。

目の前の一人は更に仲良く一緒に校歌まで歌いだした。ムードな  
いぞ。せめて流行りの歌にしたらどうだ？ ……まあでもその歌つ  
ている歌が校歌というシチュエーションは、こんな小さな一人にし  
かできないシチュエーションだろう。

周りの木々もすっかり美しい紅葉を見せ、一人の「仲直り」を祝  
福しているかのようにザワザワと音を鳴らせていた。

冷たい風が冬を余計寒く感じさせられるのだが一人のおかげで結  
構俺は温かい。気分的には。

「そうだ。明日またメロンパン食べようねー」

「そつか。オレのもアオのも白亜のもまだ残つてているんだっけ  
アオつて呼ぶのはやめる。アオじゃない。」

「明日もメロン！ メロンメロンメロン」

白亜はオリジナルソングを歌いだした。

歌いだしたが早いが、周りの電灯がパツと次々についていき、空  
も一気に黒くなつてもうさつきのオレンジ色は無くなつた。もう夜  
だな。

「ホラ一人共。もう暗いぞ。歌つてないで子供は早く帰る帰る  
「子供じゃないもん。蒼くんと同じ年だよお」

……まあ、否定はしない。

ちなみに余談となるが、途中からの別れ道で俺達は別れる。俺は  
左の道、亜夕と白亜グループは右を。亜夕と白亜の家はビックやうお  
向かいさんらしく、幼い頃から親しいらしい。

ほほー、どうりでこんなに仲の良いカップルができるわけだ。

そんな事を思つていると、もう別れ道に突入していた。

白亜は亞夕と手を繋いでいないほつの手を上に挙げて離れかけた

俺にその手をブンブンと振り、

「じゃあね蒼くん。また明日あー！」

「遅刻するなよ。朝からお前をこき使つんだからな」

「ハハハ……じゃあな……！」

俺も軽く手を振り、左の道へ進んだ。

まったく。明日もこき使つだと？ まあいいんだがさすがに手加減してくれないのかな。

家につくと、一気に自分の周りが静かになつたような気がした。  
まるで俺は一人の父親気分だ。  
やつと帰宅だよ……。

俺はその後夕飯食つたり明日の予習したり、歯磨いて……ベッドに入った。ベッドに身を任せていると、一気に下のシーツのほうに疲れがドツと吸い込まれたような気がした。俺、疲れてんのかな。冬のベッドは毛布さえも冷たくて最初はキンキンに目が覚めてしまうのだが、すぐに俺の体温で温かくなる事だろう。それまで今日の振り替えでもしていればいい。なあに、すぐに眠くなつて最初的には意識が飛ぶさ。

今日も亞夕と白畠に絡まれ他のいうか、世にもくだらない喧嘩を仲直りに導いたというか。くだらない喧嘩といつよりはお子ちゃまでの喧嘩だろうか。

まあ、幸せエンディング方面に向かつてよかつたと思う。このデート事件はハッピーエンドで終わつたのだ。パチパチパチパチ。つて、俺こそくだらない男だよな。

上の、白くて黒ずんでいるとも言える天井を見ながら多々妄想に励む俺。表情に出たりしていいのかな？ 俺明らか怪しいよな。そんな事を思いながらふと、思った。

そういうえば俺つて、なんで今一人のそばに居るんだっけ。

そうだ。俺がまだ高校に入学したての時だった。

友達もできそうにねーし、何より前の中学の奴らと離れたし、情けない事にやりたい部活もないから普通より少しレベルが高いといつこの高校を選択した。勿論合格。初めてのホームルームでの自己紹介では暗く終わらせ見事失敗。当然俺の好感度はダウン。何より普通の中の普通の普通の普通な俺は目立たない。周りで女子がキャピキャピ言つて居るのも男子のプロレスゴッコも正直迷惑だった。

だがその前に。自己紹介の時にやけに印象に残る一人がいた。

「大神亞夕。趣味、特になし。好物は辛い物より甘い物。得意教科はまあ想像に任せる。生徒会に立候補する予定。その時はまあ投票よろしく」

「ザワ……ザワ……と、皆がざわめき始めた。

自己紹介がおかしいというわけではない。

おかしいのは……、

『大神亞夕』の見た目だった。

俺よりもとても小さい体。その体つきからはとても男子とは思えないようなオーラを出している。少しデカそうな制服に、まだ声変わり手前か声変わりしたての多少高い声否定はしない。男のん俺でも思う。……可愛い。否定した奴は殴るからなど真っ先に思った。周りもどうやら亞夕の事を可愛いと思つたらしい。

「何、あの子。ショタ?」「可愛いー」「手えちっぢやいねえー」

「制服、デカいんじゃねえの?」「男の俺でも惚れそつだぜ」「絶対私投票するからー!」皆ザワザワ、ザワザワ。

「静かに静かにーー、皆、静かにーー」と、まだ若い女性の先生は教卓の前で声を張り上げた。

初めて亞夕を見て亞夕に驚き、俺は口をポカンと開けたまま亞夕の姿を見た。

元々であろう、仏頂面。口はへの字にキュッと結ばれてい。小さな体には高校用の机と椅子が合っていないのか足は床に届く事なくぶらぶらとしている。

「コイツ、本当のショタだ。とその時俺は思った。

次の奴もこれがまたルックスが色々な意味で問題だつた。

「はい、じゃあ次の人」と先生が言うとその第一の『問題の奴』が元気よく立ち上がつた。

「はいはーい、水川白亞です。趣味はあアコとのデートでえ、あ、たまにお兄ちゃんともお散歩行くよ。得意教科は国語ですー、皆、よろしくね」

「は、白亜たん……！」「あ、あの子可愛くない？」「妹系つて奴？」「白亜たんは俺の嫁だあああああああ！」「女の子よりも女子らしい……」いつもまたザワザワとし始めた。「俺の嫁」発言はよそうぜ。

### 白亜の第一印象。

口リ。妹系（実際に兄貴がいるらしいな）。短いスカートから見えている白くて細い足は可愛らしく、おまけに背も小さい。それに、細い髪を上のほうで二つに分けたツインテールはいかにも妹系の雰囲気を出していた。

その時初めて俺は「大神亜夕の彼女か」と知ったのだ。

白亜は自己紹介を終わらせて満足げに席についた。

周りでハアハアと息を荒くしている男子が気持ち悪い事この上ない。この水川白亜という人物はズバリ「口リ」なのかな。と、俺はこの当時思つた。亜夕同様、可愛い。

という事でこの初めてのホームルームでの自己紹介にてアイドルが一人誕生したという事は学校中の伝説となり、瞬く間に一人はクラス内だけでなく学校中のアイドルになつたのだ。

そんな自己紹介も、初めての高校での勉強、言わば授業も終了して休み時間になつた。休み時間と言えば周りの奴らがプロレス「ゴッコだの、噂流しだの、色々と騒ぐ時間だ。

やつぱりこの時俺は一人だったので、自らプロレス「ゴッコの仲間入り申請するわけでもなく、かと言つて女子に紛てキャピキャピと話す事も出来ない。

仕方なく、俺は一人で休み時間を堪能しようと机に突つ伏して寝る事を選択した。……今考えたらこんな生活ありえない。すると。

寝ようとする俺の行動を妨げるかのように亜夕が俺のそばへ寄つてきて、手を腰にあてていい放つた言葉がある。嗚呼、この時の事を俺は忘れた事はない。

「な、なんだよ。人が寝るつて時に……アイドルさんや。他の所へ

お行き」

俺が気だるそうにふざけてそう言つと、亜夕は少し見下ろすようにして、

「ふざけるな。……いいか、オレの言つ事をよく聞け。お前は一人だ。この学校に慣れていなければクラスメートにも慣れていない」

「……それがどうしたんだよ」

「お前への使命だ。オレと白亜に全面協力しろ」

「は、はい？」

「そうかわかつた。引き受けてくれるんだな」「いや、まだ何も言つてないんですが。

「使命は簡単だ。まだ体が小さいオレ達を安全な方向へ持つて行き、オレと白亜というカツプルを全力でサポートする。やるのか？ やらないのか！」

あちやー。ここで「無理」というとスゲー怒られそうだ。いや、もう実際なんか知らねーけど怒っている口調だし。今は亜夕に従つたほうがいいのかもしれない。

「やるのか？ というかやれ！」

「は、は、はいいいいい！」

「……わかつた。お前、蒼つて書いて『そう』って読むんだつたよな」

自己紹介、聞いていてくれたのか。

「その読み方、却下。見事に普通で見事にダサい読み方だ。だからオレはお前の事を今日から『アオ』と呼ぼう。素敵なあだなだな。よかつたな、アオ。ハハハハハハ！」

ひとしきり偉そうに笑うと、亜夕はそのまま廊下に出ていつしまつた。サイズが合わないデカい上履きのせいか、亜夕の足跡は見事に「パタテトパタテト」だった。

自己紹介での仮面が嘘だつたかのように微笑んで「機嫌そうに廊下を出たのである。

そんな亜夕を見て、俺はまた寝直そうと前を向くと、田の前には

アイドルちゃんの白亜がいた。

「うわあっ？！」

「あ、ごめんなさい。蒼くん」

しつかり『そうくん』と呼んでくれた。……それよか、白亜の童顔で可愛らしい顔は近い。

白亜もソレに気づいたのか赤面させて「ごめんなさい、ごめんなさい」と言つてから顔を離れさせる。

「アコは気にしないで。アレもアコの優しさなんだよ？ 一人だつた蒼くんに話したがっていたし。でもアコつてうまく人と話せなかつたりするからああやつて偉そうになつちゃつたり。あ、白亜は白亜って言つんだ」

知つてます。

「よひしくねつ、蒼くん。…………これからも、白亜とアコを守つてねえ……？」

白亜は、上田遣いで俺を見つめて両手を合わせておねだりしてきた。くそつ、お兄ちゃん気分になつてくるじゃないか！  
ここまでおねだりされたなら返事は勿論、

「…………了解…………」

だ。自分の顔が一気に赤くなるのがわかつた。

「そう、よかつた！ じゃあまた後でね」

ツインテールを揺らして後ろを向いたが、白亜はピタリと止まりまた俺のほうへ向きなおして、

「それとアコが、これから行われる三人組男女混合体育の授業お前をグループに入れたからな。だつて！ そつちでもよひしくね。いやつて言つても白亜が許さないもんつ」

そう言つてまた亜夕を追うかのよひに廊下に出た。  
可愛い。可愛すぎる。

と、亜夕と白亜に初めて会つた時と初めて会話した時の事を追想して俺は懐かしい気分に浸つた。

白い天井が更に優しくて懐かしい気分に浸らしてくれる。

そういえば、白亜つて本当に兄貴がいるんだよなあ。どおりでみんな口り系になるわけだ。ああ、納得。

ちょっとまた。男女混合体育の授業つて、またやる事になつたよな？ 確か先生が明日からと言つていた。まだ耳に残つている。そうか。それなら明日の体育も一人を全面サポートしなきやな。

睡魔の野郎が襲つてきたので、俺は電気を消して眠りについた。

## 白亜・跳び箱挑戦タイム

「い……痛つ……馬鹿！ いくらなんでも押しすぎだ！」

「亜夕、無茶言うな。準備運動はな、大切なんだよ。だからいくら固い人でも背中を押さないと、」

「あつ痛たたたたたたたたた！」

ついに男女混合体育の授業の日がきてしまった。どうせ亜夕と白亜と俺といういつものメンバーだらうと思つてうたのだがこのメンバーでは息が合わない。

亜夕のせいにはしたくないのだが、悪い。亜夕、お前体固い。きっと運動もしないで俺に頼つているからだ。要するに人任せって事。冬なので皆ジャージを着ている。女子は赤、男子は紺。ちなみに此処は体育館。

「アコ、頑張れー。ファイトファイトー！」

「うぐぐぐぐ……」

今は柔軟の時間だ。今は亜夕の小さい背中を遠慮なくグイグイと押しているが後できつと白亜の小さい背中も押さなければいけない事になるだろう。ただでたさえ細い体をしているのに、俺の力を少しでも強くしたら……いや、考えない事にしておこうではないか。

一通りグイグイと亜夕の背中を押して、「さて、次は白亜だな」と思いチロリと白亜を見ると彼女は怖がつた舞台のほうへ逃げようとしている真つ最中だった。そんな白亜のジャージを慌てて掴み、連れ戻す。

どうやら白亜も運動や体育が苦手なようだ。

「あ、白亜。背中を押される番だぞ」

「こやあー、白亜ひつせ背中伸びないものー！」

『柔らかくない』という表現のほうが正しくないか？

「いやいやいやー！ 白亜体育苦手なんだもん」

半泣き状態でだだをこねる。いやあ、あまりそんなに暴れられて

も困るぞ。大人しく柔軟体操をしようではないか水川白亜よ。

嗚呼、どうしたらこの子供は大人しくなるのかな。亞夕、お前も何か言ってくれ。壁に寄つかかって「腰がいてえ」なんてジジイみたいな事言つてないで。お前は白亜の彼氏なんじゃないのかい。俺一人じゃどうしようもないって。

「や、優しくやるから。な、白亜」

「……判つた。痛くしないでね？」

やつと判つてくれたらしい。ああよかつた。どうやら俺の『優しく』というフレーズで柔軟体操を受け入れたのだろう。俺達のグループだけ体操がいつまでたつても終わらなくて皆減点なんて事になつたらイヤだしな。

白亜は零れそうな涙をジャージの袖で拭いて、足を真つ直ぐ前に伸ばした状態でペタンと座る。俺の方に向けられた小さな背中は、まあ可愛らしいな。

「押すぞー」

「……うん」

グックグックと背中を押した。うわ、折れないかなこれ。

ちなみに背景はジジイのように背中を痛そうに叩く亞夕。それを背景にして俺はできるだけ優しく白亜の背中を押した。ちよつと痛いかな？

「もういいよ蒼くうん」

「ダメ。これから飛び箱なんだぞ。準備体操だのなんだのしないと怪我するかも知れないからな」

「ふええー」

そうだ。これから飛び箱だ。何段か木の箱のような物を重ねていって飛んでいく、知らない人は多分居ないであろう有名スポーツ。アレ、飛び箱つてスポーツ？

なんだか白亜がマジ泣きしそうだったので、背中をグイグイと押していた手をパッと離して「終わりだよ」と言つてやつた。泣かれると困るしな。

丁度男と女の先生のホイッスルが鳴り集合の合図が出たので背中を痛そうにする亜夕を連れて俺達は集まつた。

……話を聞くと。

やはり跳び箱だつたか。跳び箱を用意しろといふ指示が出た。筋肉質な腕を伸ばし跳び箱はアツチにあるからと説明している男の体育教師は眩しい。前はなんかの選手だつたらしい。一方女の体育教師はショートヘアで、いかにも活発で体育教師であるという事を示しているかのようにオーラが滲み出でていた。一人共バスケの顧問である。

なんでもその二人の話によると、体育倉庫に沢山しまつてある跳び箱を取つて来いといふのだ。勿論男子な。女子は向こうでマットやらを出すんだな。ふむ、女子だけヒイキか。ま、当たり前だが。話を長々と聞いてからそれぞれ俺達は別れて行動する事になつた。白亜は女子の仲良しさんとあちらへマットを取りに行き、亜夕と俺は一人並んで男子が群がる体育倉庫へ。

男子達の表情を見ると跳び箱は重そうだ。

一学期も体育をやつていたがマット運動とソフトボールだつた為高校での跳び箱は初めてであり、故に此処の高校の跳び箱なんて初めてだ。

「アオ。何ボーッと突つ立つてんだろ行くぞ」  
え。お前その体であの重そうな跳び箱を運ぶつもりか？ 一段一段重いぞきつと。

「何やつてる。早くしろ」

「お、お」

「白亜一番段の数が少ないのがいい」

跳び箱もマットも全て用意し終わり、各自飛べそうな跳び箱の前へ行けと指示されて白亜と亜夕と俺は一番段の数が少ない跳び箱の前にいた。

逆に段数が少なくて跳べなさそうだ。「そつだな。オレも段数が少ないのが……」

便乗しちゃったよ。

「先生の指示も出でているし、この跳び箱は空でいるしな。飛びか」  
亜夕は飛ぶ気満々のようだ。ブラブラとしたジャージの袖を捲つて、亜夕は早速助走をついた。

「お、お、お？ 跳べるか？ その小さい体で。どうだ？」  
トン。

軽い音が俺の耳に響いた。亜夕が跳び箱に手をついた音。軽々しく自分の体を持ち上げるように跳び、更にまた軽々しく綺麗に亜夕は着地した。

着地するが早いが俺を見て、鼻で笑うかのように笑つて一言。「侮るなよ」と。

クラス全員が亜夕に釘付けになつてていたらしい。皆拍手喝采。「すごい、すごいね！ 亜夕くん」「お、チビ亜夕が跳んだぞー」「可愛い可愛い！ うちに欲しいよー」自己紹介の時同様ザワザワ。どうやら白亜も自分の彼氏の活躍が嬉しかつたようで、パチパチと小さな手を鳴らしている。……んな跳び箱くらいで大袈裟な……。隣でパチパチと手を鳴らす白亜を見て俺は、

「白亜も跳ぶよな？」

「……ええ？ 白亜は無理だもん。亜夕は運動神經いいけれど白亜は悪いんだもん」

「案外跳べたりするかもしねないぞ？ 亜夕みたいに跳べたらまた周りの男子がハアハア息を荒くするかもな」

「いやー！ それは気持ち悪い！」

さすがに息を荒くされるのは気持ち悪いと感じていたようだ。

そんな気持ち悪いといつ言葉を発した白里は細いツインテールをいじり、

「……まあ、蒼くんが協力してくれるなら、いい、けども？」

「や、そうか！？ 跳ぶのか！？ いやあ、自立してくれたようだ父さんは嬉しいよまつたく……」

ああ、ようやく自立してくれたのか。まるで巣立つ子供を見送る父親気分ではないか。

「落ちそうになつたら助けてね？」

「おお」

「跳べなかつたらフォローしてね？」

「ああ」

「何があつたら蒼くんの責任だよ？」

「…………」

随分と要望が多いな、おい。

まあ仕方がない。一人の物事を良い方向へ持つていいくのが俺の使命だからな。そこへんは嫌でも付き合おう。

飛翔無し。継続中。

白亜は、飛び箱から離れて助走をちけた。  
チマチマと歩く音が響く。

いつの間にか他の奴らは白亜の飛び箱、ギャラリーとなつていて、  
白亜ファンも亜タファンも真剣な眼差しで白亜の助走をつけるシ  
ンを見ている。先生までもが真剣に白亜を見守るかのように見つめ  
ている。口はぎゅっと噤んでいる。

……オイオイ、なんだ、この世にもぐだらない光景は。

「蒼くん！ 隣に居て！」

「はい……」

「アオ。白亜に何かしたら後でアレだからな  
アレってなんだ。とりあえず白亜をまた泣かせたりしたらぶん殴  
られるのが結末である。起承転結の結だな。

「白亜たん頑張れー！」

「白亜ちゃん、頑張つてねー！」

「はーい！ 飛べるか分からないうけど頑張りまーす！」

白亜の返答に周りがまた興奮し始めた。「自分としては飛び箱に  
失敗する姿が見たいよな」。などと。何を求めているんだお前達は。  
俺は一回ため息をつき、飛び箱の隣に立つた。向こうからは白亜  
がダッシュのポーズで待ちかまえている。どうやら白亜は本気のよ  
うだ。

やがて、ツインテールが揺れたかと思うと白亜は俺に合図なしで  
突っ走ってきた。走り方の可愛さにギャラリーの男共が騒ぐ。  
踏み台までやってきて……踏み台を踏み……手をついて……そう  
だ、跳ぶんだ！ 白亜、飛べ！

すると。

「ひゃんっ」

……ひゃん？

高い声が聞こえた。ああ、白亜が跳んだ時に落ちたりでもしたのかな。まあ、確かにすつとんきょーみたいな声だしな。落ちたんだろ。まあ跳べたは跳べたで結果オーライ？ 白亜、頑張つたぞ。ご褒美は亞夕からのほっぺにチューだな。

そう思いにへりと笑つて白亜の跳んだ飛び箱を見る。

ん？ んん？

……飛び箱の上にツインテールのシリエット。小さな腰は見事に飛び箱に乗つかつている。「コイツ、跳んでなかつたのか！ 飛べなかつたからあんな声出したのか。

小さな顔は涙目だつた。俺の方を向いている。後ろに少し頭がこちらに向いているのだ。

ダブダブの赤いジャージでこちらを見て。半泣き状態。小さい尻は……うん、まあ、可愛いな、うん。男から見たらな。

「ば、バカ！」

思わず声に出していた。スポーツのできる俺の血が騒いだのだろう。

「蒼くん？」

「腰をもつと上げて跳ぶんだ！ 白亜、ちんまりとした飛び方だつただろ？ だから、もつといつ……」

「ひ、ひや……」

「え？」

「ひやああああああああああああああ！ アドバイスは有り難いとして蒼くんどこ触つてんのよ！ 変態！ 痴漢！ ばあああああかつ！

「へふうつ！」

見事に顔面の頬に白亜のビンタを喰らつ。い、痛い。

無意識の内に腰を触つてた……？ 下のほう……？ 鳴呼、全ては俺のスポーツ魂のせいだ！ いつもは面倒くさがつてゐるくせに！ 「ごめん！」と謝り続ける俺だが、飛び箱を跳ぶ事ができなかつたショックと俺に……その、触られてしまつたショックで白亜はバカ

「うわあああああああん！」まだアコにも触られた事ないよおおおおおおおー！」

「ぐ、変な事を言つたな！」

「触られた事ないのか。

「何を納得してるんだ！ 皆に勘違いされるだろ！ オレはそんな破廉恥じやない！ ……あ

「え？」

一通り俺にブチギレた後、飛び箱から降りてきてまだ泣き続ける白亜の頭を撫でながら亜夕は何かを思い出したような表情をし、俺に向かつて不適な笑み（どう考へてもニヤリだ）をぶつけてくる。

え、何？

「アオ。今白亜は何をしている？」

「は？ 泣いてるんだろう？」

「そうだよな」

「？」

頭の中は疑問符でいっぱい、いつか破裂しそうな気分だ。

「言つたよな、オレ。白亜に何かしたら後でアレだよなつて。泣かせた上に人の体に触る？ ハツ。お前もいい御身分になつたものだな」

「いえ、あの」

「問答無用！」

「ひいいいつー！」

授業が終わつて休み時間になり、追いかけられ……帰宅する時にも追いかけられて逃げまくつたのは内緒だ。ちなみに亜夕は、教科書が沢山入つたバッグで攻撃しながら追つてきたもんだから恐ろしかつた事この上ない。

教科書は案外痛いからな。

結局その後教科書入りバッグでボコボコにされた俺だがな。

夕方の断末魔を聞いた人はきっと数名いるだろう。

飛翔無し。継続中。（後書き）

お久しぶりですー。空蝉です。

忙しい事が多々ありましてこれない日が続き……やつと此処のサイトに来て神実の亜月を更新し、今日になり、今に至るわけです。

ああ、やっぱり久しぶりだなー……。

またまたスペースをお借りしました。ありがとうございます。  
ちなみに体育という目次が二つあると思いますが、なんていうのかな。体育1を保存しながら書かずにそのまま投稿してしまったので仕方なくこれは2という形で投稿させていただきました。いやはや、申し込みないです。

見ない内にユニークアクセスや累計アクセスが増えしていく本当に嬉しい事この上ありません。

題名で皆さん来てくださるのでしょうか。中は駄作ですがねー。  
いや、これでも苦労しているのですが。

長つたらしくなりました。

では、今後も応援よろしくお願ひします。

空蝉 彼方でした。

## 亜夕・パニック！

……休日だ。

あの亜夕の鞄でボコボコにされた日から何日か経ち、あつといつ間に今日はもう休日。日曜日だ。

子供のお守り（おもり）もしないで今日は俺だけの安らかな時間が過ごせる。しばらくやってなかつたネットゲームでもガツツリとやるか。それとも今日はのんびり寝ていようかな……。

一人が居ないと少し寂しいという気持ちも半ばあつたが、今日は一人の休日を満喫しようと思う。勉強も必要だが、今の疲れきっている俺にはやっぱり休憩だよな。マンガでも読むか？ ゲームやるか？ 寝るか？ 中学時代の女子とゆる一リメールでもするか？ モヤモヤと悩んでいたが。

結局自分の部屋で、自分のベッドの上で寝ころんで休憩する事を俺は反射的に選択していたらし<sup>い</sup>。いつの間にか俺はふかふかのベッドの上で寝ころんでいた。しかも瞼<sup>まぶた</sup>を閉じている。睡眠優先になつたという事は俺も少し年をとつた？ ……いや、まだ年をとつたとは言えない年齢の俺なのだが。

……俺も亜夕みたいに可愛い子見つけてデートでもしていい年頃だよな。

無理か。ああ、無論、無理だ。

最近は亜夕と白亜の傍にいて女子と話した時なんかないし。ついうか入学当初から女子とは話したりしていないのだが。

彼女を作ると言つても相手はうちのクラス女子だ。全てはうちのクラスの女子が悪い。

第一に。チャラい。金髪に染めている奴もいれば茶髪や不自然すぎる黒髪など。コイツら校則という物を知らないのか？ と誰もが

言いたくなるだろう。

本当はうちの学校は校則という物がしっかりと存在している。髪を染めるのもやみやたらにスカートを短くするのも禁止される。それなのに変な事に憧れを抱いているバカな女子共はスカートを短くし、髪を染め、理解不能と言つていいくらいの文字を書くわメールを送るわ……何が可愛いんだ？ その理解不能ギャル文字でテストを減点された奴だつている。

女子というのは理解不能だ。

だからきっと俺の女の子のタイプとしてはそんなチャラいバカ共のような女の子で。清楚で礼儀正しくて、化粧も何もしていなくて……大人しいといつて、顔が綺麗とかじゃなくて『綺麗な』女の子がいい。居るのだろうか。そんな子。

いきなり耳に音楽が流れ込んだ。どうやら流行りらしい元気な曲だ。

その音に異常に驚き、俺は目を一気に覚まして飛び起きた。  
眠いなあという感情を今持つてているという事は俺はタイプの女子を想像している間に寝ていたのか。バカだな、俺も。

その音源の枕元の携帯を急いでパカッと開くと、画面には「亜夕」と名前が表示されていた。亜夕から電話か。それにしてもまだ朝と昼の微妙な間の11時だぞ。一体アイツは俺に何を話したいのか。それはさておき早く電話でないとヤバいので、急いでボタンを押して携帯を耳にあてた。

「も、もしもし？」

『…………』

「亜夕？」

『…………』

『もしもし？ じゃああああああああいっ！ お前、オレの電話を

待たせるとはいひ度胸してゐるな。また砲攻撃を受けたいのか?』

たとえ電話だとしても、亜夕の怒り度が判る。

「『』、ごめんごめん。……で、用件は?』

亜夕の凄まじい怒鳴り声がまだ耳に残つてゐるよつた気が俺にしたのか、思わず片耳を塞いで会話に望む事にした。俺の行動がもし亜夕に見られたら今以上に怒られているだらう。

『アオ、今日暇か?』

『いや、暇なんだけど俺リアルに同性趣味ないぞ?』

『そつちの意味で言つたんぢやない! オレと白亜の事だ』

白亜?

しばしの無言の間に俺は耳をすませる。本当に静かだつたのか、それとも白亜の声が大きかつたのかよく解らないが確かに白亜は「アユー。暇ー」と嘆いていた。相変わらず高くて可愛らしい声だ。少し耳が癒されたのが解る。

「今お前等何処?』

『白亜が遊びに来いつてメールしてきたから仕方なく朝の8時からわざわざ白亜の家に来たんだ。両親は居ないらしい。昨日から一人も仕事だとか。あの両親はいつも大変なんだよな。まあそれで白亜がどうもつまらないらしくて。それで遊び相手がオレなんだよ。……何言いたいか解るか?』

白亜はつまらないと思ひ彼氏のショタ亜夕を呼んだ。そして亜夕が仕方なく朝っぱから遊びに来てくれ、……問題はその後。まず少し説明しよう。白亜は口リだ。口リだからこそ白亜の部屋はすごい。可愛らしいぬいぐるみ、服、カーテン。何もかもが女の子らしい、口リの中の口リの私物と言つていいほどの物が白亜の部屋の中納められているのだ。ご両親は白亜にベタ惚れらしく、(わからんでもないが)一人つ子の白亜のいわゆるバカ親らしい。そこでその家具なども可愛くされたというわけだ。

問題がその部屋。亜夕はその中で一人、口リ白亜の相手をされているのだ。

きつと、無理矢理頭にリボンを乗つけられたり可愛い服を着せられて「可愛いね、可愛いねー」なんて言われたり可愛くデコレーションされた携帯でパシャパシャと撮られたり。そんな状態に置かれているに違いない。想像するのはとても簡単だ。

「解った。状況は把握したぞ、亜夕」

『 どうか。そこで、お前と電話する為に手を洗いに行くからと洗面所に居るオレだ』

「普通トイレじゃないか？」

『 うるさい。そんな事言つたら勘弁にキャラ崩れだ。……とにかく。オレが解放されたいというのもあるけど、白亜と何処か行きたいんだ。ウインドウショッピングでもいいから。だけどお前が居ないとオレは可愛い服を白亜に試着しようと迫られるだろう。だから、来てほしいんだ。んー、そうだな。早く解放されたいからタイムリミットは電話を切つてから30分にしようかな』

いやそれ無理だろ。

『 頼む。早く来てくれ。じゃ』

「 ちよ、お、」

ブツンと電話は切れてしまった。

しゃあない。白亜の家は此処から遠くはないしな。着替えて用意する時間もあるだろ。

切れた電話を少し呆然と見つめてから俺は着替え始める。待つてろよ、亜夕！ 今すぐ可愛い物から解放してやるからな！

## 亜夕・パニック！（後書き）

いやはや、またまたお久しぶり（？）でしょうか。空蝉です。お久しぶりなのかな？

神実の亜月 という私が書いている小説があるのですが、何しろこちらより話数が少ないわけで。どうしてもこっちを更新しなきやとは思っていたのですが……。

神実の亜月は連載中です。検索をかけてみてくださいね。

ちなみに。

この2人+1人 休日 ですが、次の話に繋がっていく予定です。まだ題名は未定ですが、2人+1人 解放 とやらを書こうかなあと思っています。

話的に亜夕と白亜のデートと、その中に蒼に入る話でしょうか。

ちなみに亜夕がただ単に蒼の事をアオと呼んでいるだけでやつぱり読みは「そう」です。解りにくい名前をつけた私がバカでした！

では、またまたスペースをお借りします。  
休日 のほうの話をクリックしてくださいの方、ありがとうございます。

コメントや評価は大変励みになりますので、いつでも評価受付中です。まあ、こないという現実が私に差し掛かるのが更に現実だつたりしますが（笑）。

では、おもろいことを願ひしめや。

おもろいことを願ひしめや。

息を荒くしながら、なんとか指定の時間よりも早く白亜の家の前に到着した。

とりあえず邪魔にならないように玄関のドアの狭い隙間にボロの自転車を入れて、亞夕を想像して焦る。すぐに助けてやらなければ。ワタワタとした様子の俺は、『水川』と書かれた表札の近くの呼び鈴を押す。

通常のピンポーンではなく、ブーブーという音だった。

それから間もなく呼び鈴というよりブザー的なから白亜の声が聞こえた。『あー蒼くん？ 今いくよー』ヒルンルンの白亜が俺にそう言った。

カメラでも見て俺だとすぐに認識したのだろう。

それからパタパタと歩く音が聞こえ、いきなりバーンと威勢良くドアが開いた。

「お、おう、白亜」

「あー、うん、蒼くんこんにちはー。えと、アコが呼んだんだよね？ ま、入つて入つてー。お茶とケーキ出すよー」

言われるがままに俺は靴を脱いで玄関に入り込む。靴を脱ぎながら、「俺、流されてないか？」と亞夕を助けに来たという指名を捨てられたという事態に近いのか、そう思った。

つやつやとした茶色の木のような物でできた廊下を滑りそうに歩き、白亜についていき部屋に向かう。……歩きにくいかも。

そして辛うじてついたのが、勿論白亜の部屋。木製かと思われるドアには表札のようなプレートのような物で『白亜の部屋』と書かれていた。部屋の中はプレートからして想像できる。

「蒼くん、遠慮しないで入つててねー。白亜、ケーキとか持つてくるよ。その間にアコと話してたりしててね」

その間？

「おお、わかつた。ケー キすまないな」

白亜がピンクのスリッパをパタパタさせて階段を下りるのを見届けてから俺はすっかりヒンヤリとしたドアノブに手をつき、躊躇いがちにドアを開けた。

「…………」

ドアを開けて一歩踏み出した世界には、正に絶句といつ単語以外に思い浮かばない。想像通りだ。

お姫様のようなピンクのベッド。学習机って言うのか、コレは！ とでも言いたくなるほどの白くて所々にハートが象られた、きっと『学習机』。ピンクのレースかと思われるカーテン。熊の縫いぐるみ。ちなみにでかい。後は想像がつくだろう。ヒトセトラとでもしておこうか。

果然と立ち尽くしていると、ほぼ確実に病んでいる亜夕がそのピンクのベッドにちょこんと座っていた。半泣き状態。

薄いピンクの女の子用のフリフリのワンピースを着て、ピンクの花を頭につけられ、短髪を無理矢理二つに結われている。傍らには無理矢理置かれたのでかろう熊の縫いぐるみが居た。

「ごめん、亜夕。笑つていいか？ 似合つてるぞ。」

「ふ……くく」

「な、何が可笑しい！」

顔を真っ赤にして俺に向かって亜夕はそう言つた。

隣の熊の縫いぐるみに亜夕はドスドスとパンチをくらわせて凄い顔で熊を睨みつけながら、

「恥だ！ 大神亜夕の恥だ！ こんな姿オレじやない！ 恥だ恥だ恥だ恥だあああああああああああ！」

「亞夕、落ち着け。縫いぐるみが破れる。大丈夫だ、似合つてるぞ」

「似合う似合わないの問題じゃないだろうが！」

「亞夕、落ち着け。縫いぐるみが破れる。大丈夫だ、似合つてるぞ」

すみません。

まるでゲームのラスボスのように俺をキッと睨み、引き続き熊にアッパー、パンチ……ボスボスと音がする。熊も耐えてるよな。

「大体蒼。お前、オレを助けに来たんだろ？ が。少しほ着替えさせられたのしたらどうだ。今白亜が居ないんだからとりあえずオレは外出で解放されたいんだよ」

「白亜、遅すぎるよな」

「チャンスという事だ。多分、ケーキを潰してしまったりしてるだろ……」「

となると、白亜のデジが幸運になるわけだな。わたわたしている白亜の様子が伺えるようだつた。

「とりあえず着替えさせてくれ。どうやって脱ぐか分からないんだ」

「仕方ないなあ」といいつつ、俺は亜夕の着ているなんともまあ可愛らしきピンクのフリフリワンピースに手をつけてチャックを後ろから下ろしてやつた。

えーと、勘違いすると思うかもしれないが至つて今の俺は興奮してないし、第一薔薇だのビーとエルなど興味ないからな。

チャックを下ろして脱がしてやると、亜夕は中に何故か体操着を着ていた。名札の『大神』がちろりと見える。

「ああ、体操着か。別にいいだろ。白亜に着替えさせられる事を想定していたんだ。着替えを見られるのはさすがにイヤだし。でもまさかこんな着せられるとは……」

そりや予想外だわな。

というわけで、体操着の上から元々着ていたらしい生温かい長袖のグレーのシャツと、長袖で厚手のブラックのパーカーを着せてやる。ズボンくらい自分で履けよ。

「わあーってるよ

ちゃんと「わかつてるよ」と言つてほしかったのだが、亜夕はやっぱり不機嫌なのであえてツツコまないようにしておく。

ぶくぶくと文句を言いながら亜夕は紺のズボンを履いて、ちゃんと

とチャックも閉めた。着替えた亜夕はなんだか抜け殻から抜けたかのようにサッパリしたような表情をしている。

「はあ……一件落着。白亜のアオのケーキを手間取つてくれないな。おかげでまだ来ない」

「それはいいんだが、大丈夫かな、白亜」

「とりあえず、白亜を置いて逃げるぞ。早く逃げないと追いかけてくるからな。此処は一階だが、飛び降りて着地できる高さだし此処から逃げるぞ」

飛び降りるつて、アンタ。

「ホラ、早く早く」

亜夕は手をヒラヒラと振り、窓に足をかけた。大丈夫か？

その時。

「『めんね、ケーキ探しても探してもなくつて買つてきちゃつた！ 蒼くんとアコと白亜の分だよー。ついでにお茶も持つてきちゃつた。紅茶でいいかな？ ……つて』

そこまでいい終えると、亜夕を『可愛くした』犯人、白亜がやつてきた。少し顔は蒼白していて、俺達の行動に唖然としている。

「あああああ、アコ、何やつてんの！ まさかまた白亜から逃げだそうとしてたんでしょう！ もつ、許さないんだから！」

許してください…………！

「蒼くんは黙つてて」

「すみません」

「……アコ。可愛い服まだまだたあつくなさんあるのー。だから逃げよつとしたお詫びに着てね、コレ。あ、蒼くんにも着せよつかなあ／＼？」

魔性の笑み。

白亜はにまーと微笑んでから逃げよつとしていた亜夕を引っ張り、無理矢理パークーなどを脱がしはじめた。ちょっと、いくらなんでも限度つてもんが……。

「蒼くんは後で白皿みたいにツインテールにしてあげるよ。……もう、アユジタバタしないでえ」

「うわあああああああああ」

俺も、逃げたほうがいいのかな。

見事に俺は小さこシインテールにされ、しづらへおまけじとが続くのであった。

## 兄アンドリーふ？

月曜日は、やはり何処の学校もほぼ同じように朝会で始まるのである。

定番と言えば定番のダルい禿<sup>はげ</sup>校長の長々とした訳の分からぬ話しだ。ちなみに、うちの校長はもう早々と年なのが活舌が悪く、何を言つてゐるか解らない次第である。通訳が欲しいね。

定番なのがどうか解らないが、夏場には鼻血を出して慌てる奴も居るし、季節限らず貧血でぶつ倒れて保健室行きになる奴も居たりする。やはり、朝会の中での出来事だ。

幸い俺はぶつ倒れてみたり鼻血を出してみたりした事はないが、部活をやつていな事もあって長つたらしい朝会には付き合つてられないし、疲れる。教室に戻ると「解放されたぜー！」と、喜びに満ち溢れるだらう。

と、関係のない話は置いといて。

今日も同じように朝会だ。さつきいつもぶつ倒れる奴がまた今日もぶつ倒れたが、校長は気付いていならしいのか意味不明語で話を続けた処だ。先生がその生徒をまたかと思いながら（多分そう思つていただろう）保健室に連れていつていた。

……ダリイ。

一言で言えれば、ただそんだけ。早朝とは言わんが、朝っぱらからこんなのがやつてられつかよ。

からは、校長の話が終わると生徒会役員のお知らせが入る。校長が自分の鬚<sup>ひげ</sup>を撫でて「ふおつふおつ」と笑つてから舞台を降り、今正に生徒会のお知らせが入るうとしている時だ。

生徒会役員の、大神亞夕<sup>おおがみあやつ</sup>だ。ふうん、今日は亞夕か。

そういうえば昨日亞夕と一緒に白亜に酷い目に合はされたな。白亜は相当喜んでいたのだが。

昨日の事でやはり期限が悪いのか、亞夕はまたムスー<sup>チ</sup>とした顔でトントンと軽く階段を上がる。此処からでも身長が小さいのが解る。

列の前の方を見ると、やはり白亞<sup>ヒトミ</sup>が亞夕の勇ましきような微妙な姿を見てワクワクしていた。周囲も白亞<sup>ヒトミ</sup>と同時にワクワクしているのが解る。

相手が今日は亞夕だからだ。もし普通と男子生徒だつたら此処までざわめきは起こらない筈だ。そこまで亞夕は『人気』なのだ。

やがて、マイクの前に亞夕が立ち、皆が静かになった。

生徒会からのお知らせ。何を知りせるの分からないが、どうせ落ち葉掃きだの制服のみだれについてだろ？。

「…………」

どうやらマイクが高すぎたらしく、亞夕はムカついた表情をしながら（明らかにキレている）、マイクの高さを調節する。随分と亞夕に従い短くなった。

「……生徒会からのお知らせです。落ち葉掃きを行います。強制はしませんが、できれば来る事。朝の七時に校庭に集合し、各自<sup>ひとり</sup>筆を利用。以上

やはり、落ち葉掃きだったか。

「くつそー、落ち葉掃きは明日じゃないのかよ！ しかも何で放課後の今日に俺が落ち葉掃きなんかやってんだ！ 意味わかんねー！」「仕方ないだろ。生徒会は放課後にも落ち葉掃きをやる事になったんだ。オレ達だけじゃ足りないからお前と白亞<sup>ヒトミ</sup>も呼んでやつたんだ。

感謝する

「

「感謝も何も……。しかも、白亜お前落ち葉で遊ぶなー！」

白亜は制服を汚すのがイヤなのか、何故か体育着を着ていた。こまみに上に赤ジャージ着用。そんな姿で、色々な色をした落ち葉を拾つては並べ、拾つては並べ。

「見て見て、蒼くん。落ち葉の電車ー」

五~六枚並べてある。白亜にとつての電車らしい。

「はいはいー、よくできましたよくできましたー。って、違うだろ

「おお、蒼くんのノリツツ ノミはテンポ良いねー！」

親指を立てて、俺に見せてくる。ノリツツ ノミの件で褒められても嬉しくはありません。

一応、俺も渋々箒で落ち葉を掃ぐ。井あ、一円くらいになつたら落ち葉は無くなるかもな。落ち葉掃きとこう存在もしばらくは消えるだろう。辛抱だ。辛抱。

ひょっとして、俺は朝と放課後にしばりく落ち葉掃きに参加する事になるのか？ 強制という事でムシャクシャするが、とりあえず良い運動にもなりそうだしどうだ朝の早起きという事で。

七時はキツいよな。起きれるだろうか。携帯のアラームでいいかな。

「ひりアオ！ ポーッとするなー！」

「は。はい、すみません亜夕様」

妄想に浸つていいたら、亜夕に叱られた。

ふうと溜息をついてまた箒で落ち葉を掃き始めると、白亜が無邪気に恐ろしい事を言った。

「ねえアコ。蒼くんに働かせたいなら、これだけ掃かないと何々するぞーって何か決めておけばいいんじゃないの？」

まづい、そんな事言うな、白亜。

「それもそうだな。それもそудだし、お前やる気ないとこつ事はお前の使命を忘れているんじゃないのか。ということで、使命を少しは果たせてあげよう。オレ達の役にたつんだ。とりあえず落ち葉掃

け。あつちからあつちまで「

小さな手で指定された距離。それは、十メートル以上ある長さの道だった。

ちなみに俺の学校は、まつすぐな長すぎとも言えよつ道の隣に位置するわけで、十メートル以上はある道が続いているのである。

「そ、それは長すぎだろ！」

「お前ならできる。できないのならまた鞄でぶつ叩くぞ…」

「脅し！？」

「頑張つてね、蒼ぐーん」

「おい……」

仕方ないから、落ち葉を全速力であつちからあつち（十メートル以上）掃く事にする。十メートルが短そうに見えても、落ち葉は溜まっているので時間がかかりそうだ。

校庭の砂や道の砂が塵取りなどに入るだろうから、もつと時間がかかる筈だ。たとえ十メートル以上くらいだとしても、侮る事はできないし本気でやらないと亞夕の鞄が待つているぞ。しかも、夕飯に間に合わない可能性も考えられるのだ。

「……やるか……」

溜息をついてから制服の袖を捲り、すっかり冷たくなった簫を手にして落ち葉を掃く。テンポの良い音が、落ち葉を掃くと同時に俺の耳に響く。

「こらアオ！ やる気あるのか！」

「ひいいいい！ ありますありますやらせてください亞夕様あ！」

簫のスピード、アップ。シャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツ……。俺、召使いみてえだ。

そのまま、大体七時前まで生徒会は落ち葉掃きを続行していた。

まあ、大体は俺が落ち葉を掃いたも同然なのだつたが。

落ち葉掃き、終了！

生徒会の野郎達と共に、終了の挨拶をする。「今回もしっかりと落ち葉を掃いたので、反省を一人ずつ……」てな具合に。反省つてのは無いので、調子じいて「ちゃんとできました」とほざいておいた。一番反省すべきは亜夕だ。俺を脅しておいて人任せ。まあ、別にいいんだけど。

ていうかそもそも亜夕が来ていた意味はあったのか？

亜夕をちらりと横から見ようとしたが、帰宅用図がでたので校庭にほっぽった鞄を取りに行こうとした。が、それを止めたのは亜夕の声だった。

「…………

声ではない、亜夕の無言。声というより、様子と表現したほうがいいのかな。唇噛んで、目には涙溜めて。今にも大声出しそうな顔でさ。

「お、おい、亜夕。どうしたんだよ、泣くなよ  
何があつたのかは知らないが俺の本能と『使命』血が疼くので、白亜に声をかけずにはいられなかつたのだ。

え、うそーん。泣いてる？ おい、亜夕の奴何処行つた？ まさか、帰つた？ そういえば見たい戦隊物ドラマが夕方にやるとか言つてたな……。

ショタとは言え、こんな時にショタさらけ出してんじゃねえ！ なんだよ、戦隊物つて！ お前高校生だろおー、と叫びたくなつたがその本人が居ないわけで。生徒会の奴等も帰るの早いし。ということは、俺と亜夕だけ？

この子を泣き止ませるとでも言つのか？

「は、はははは！ おこ、似合わない泣きつ面をまた今日もしてるな、亜夕！ 一体どうしたんだよ、あははは……」

すると白畠は涙声で、

「ペンドントを、無くしたの……」

と、一言。

これがまた普通の女子の野郎だつたら俺はぶつ飛ばしているかもしれないが、相手は白畠なのだ。ペンドントを無くしたと言われたくらいで俺は怒らない。何度も言つが相手が白畠だからな。

……ちょっとまで。ペンドントとか、アクセサリーなどを持つてくるのは一応校則としてやバいし、生徒会の前で堂々とペンドントを付けていたのか？ 生徒会が白畠だから許したのだろうが。

あの、ハート型で真ん中にピンクのラインストーンがついた、ピンクゴールドっぽいやつか？ と聞くと、

「うん。本物の宝石じゃないし、本物のピンクゴールドじゃないけどお兄ちゃんがお小遣いなくてピンチー！ な時に買ってくれた安いので……」

お小遣いなくてピンチー！ と女いといつ畠葉は余計じゃないか。

「俺が同じの買つてやるから、」

「駄目なの！ お兄ちゃん、白畠が誕生日の時に買つてくれたから

……！ あれじゃないと、駄目なの……」

「…………」

そうか。お兄ちゃんつ子だつたな、白畠は。

確かに、大事そうにつけているのは覚えてこるし、胸元でキラリと目映く光つっていたのも、覚えてこる。白畠に似合つた可愛いやつだつた。

絶対に何かあつたら助ける。すると契約されたのだから（畠夕に勝手にされたのだが）、俺には今白畠のペンドントを探すという使命ができた！ だから、落ち葉掃きよりも頑張つてやるうじやねーか！

「わかつた、白畠。そのペンドント絶対に見つけてやる」

「ホント？」

白畠の顔がパアツと明るくなつたので、その笑顔だけでも、感謝

されるだけでも俺は頑張れるよつた気がした。

色々な所を探した。

道、残つた落ち葉、併<sup>へい</sup>、アスファルトの舗<sup>ひび</sup>の中も。

ない、ない、ない、ない、ない、ない、ない、ない。

くそ、綺麗に掃除されてやがる。ひょつとしたら、落ち葉と一緒に

に片付けられた？

「そ、蒼くん。ありがとう。もう白亜、大丈夫だから、」

「それじゃあさつきと喧<sup>けん</sup>つてる事が違うぞ。アレじゃなきゃあ駄目<sup>だめ</sup>なんだろ」

「でも、」

「大丈夫」

ポンと、白亜の頭に手を乗せて撫でてやつた。ツインテールがぐしゃぐしゃにならな<sup>こな</sup>つて、ぱびぱび<sup>ぱびぱび</sup>。撫でると、白亜がはにかんだのがわかつた。

「……お兄ちゃんみたい」

「ん？」

「な、なんでもないもん」

ペンドントは、無かつた。

もう探してない所はない。諦めたくはなかつたのだが、どうやら此処で諦めざるを得ない。内心、諦めたくないのだがこの時間。白亜もきっと寒いだろ<sup>う</sup>。それに、学校の時計はすっかり七時を回っている。俺も帰らなきゃ怒られるぞ、鬼母<sup>おにめ</sup>に。

怒られるのもイヤだが、白亜のペンドントが見つからなくて白亜が悲しい思いをするのが一番イヤだ。そんのは、耐えられない。

だから地面を探した。あるはずもたいの」「  
寒いのに、汗が伝う。

「……蒼くん……」

白亜が泣きそうになつた、実にその時であつた。

「白亜」

遠くから、白亜の事を呼ぶ声が聞こえた。  
人物は近づいてくる。亜夕ではないのは確かだ。やがて、ドンドン近づいて、やつと姿を把握できた。視界にその人物は入る。  
俺より少し年上だらう。背は俺よりも、高い。男だ。声はやつぱり俺よりもかつこよくて、余計な一言だが彼は声優にむいっているだろう。ルックスもよかつた。

「お兄ちゃん……！」

はい？

「お兄ちゃんお兄ちゃんわーいっ！」

さつきの涙が嘘だつたかのように、白亜は『お兄ちゃん』に抱きついた。まず一言。進歩の差があります。

そして一言。

何。この急展開。

「心配したんだ。白亜の帰りが遅かつたからね。お兄ちゃん心配したんだぞ。もー白亜が居ないと落ち着かないし勉強にも集中できな

いし」

ルックス良い割りにはシスコンか。

すると、白亜のお兄さんは俺のほうを向き、

「こんばんは。蒼くん、かな。白亜から話は聞いてるよ。メロンパンの時は凄かつたんだって？」

メロンパンで印象づけられているようだ。

「で、何か探してた？ 困つてたみたいだけど」

「実を言うと、

「コレ、道端で見つけたけど虫眼のだよな？」  
「ちょっとと見て。」

卷之三

待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て

例のペンダントだつた。

お兄ちゃん……」

「うん、誰かに引っこかかって、その誰かが移動するときに取れたのかな？」 どうりで離れた所にあつたわけだよ。これからは気を付けろよ」

「うそ、あつがひ。……」ぬるなれこ。「あんね、蒼くん！ 本  
洋服本洋服」ぬるなれこ。

「いや、いいよ。大丈夫」

お兄さんが来てくれて成功だったのかもしれない。  
それはともあれ、ペンドントが見つかってよかつた。

白亜に兄貴が居る事は知っていたが、まさかルックスが良くて優しそうな人だと思わなかつた。軽くパソコンが入つている事も勿論予想していなかつたし。まあ、こんな兄がいれば白亜はこのように口りになるのだろう。

ルを送つてきてそのまま会話メールになつた時である。

『水川優輝』。名前に優しいという字が入つているなんて、彼に似合つているなあと思った。

そして後日早朝、今日の落ち葉掃きにて俺は落ち葉を一枚掃き逃していたので、亞夕の鞄アタックを喰らう事になる。

## 兄アンドリーふ？（後書き）

これを見てもらつた友人に、誤字を指摘されました、空蝉を「そらせみ」とよく間違われる「いつせみ」彼方です。こんなにちはや誤字、直そう……。

それが、感想です。ああああ誤字恥ずかしい！暇があるときに、誤字を直そうと思っています。

冬休みは「ダラダラと過ごす」！

はい、これ俺のモットー。

の筈はずだったのにまた餓鬼がきから誘いが来たぜ。

クリスマスは、両親と俺でかなり寂しい時を過ごした。なんせ俺に妹弟兄姉が居ないわけだから余計寂しい。寂しいとか侘びしいぞ、うちは。

未成年の俺は適当に炭酸莓味ノンアルコールのシャンパン、いわばジュー<sup>ス</sup>を飲み、両親はこれまたすげえ豪華なワインを一本飲んでいた。香りが良いらしいな。

そして年末は適当に紅白見ながら「知ってる奴が居ねえ」とぼやき、ソファでダラダラとし、ぱっとしない年末を過ごし……

西暦の一の位が一つ動いた。

元旦には更に適当に書いた手抜き手書きの年賀状を出し、ダラダラした。

そして何日かダラダラと過ごし今の一月四日に至るわけである。

第一感想。冬休みもうすぐで終わりかよ。早いよ。

第一感想。さみいからとつと春來い。そしてやつやつ一年生になつて先輩になりてえよ。

ほんと、そんだけなのである。俺ほんとに将来大丈夫か？ なんて思う時が多くあるけどな。

そして、ダラダラ日常から解放してくれるようになると（迷惑だけどな）一通のメールが届いたわけである。内容はこんな感じ。

『件名：明けましておめでとう蒼くん！ 本文：蒼くん、明けましておめでとう！ 今年もよろしくね。というわけで、今から蒼くんを白亜の家にて主催の新年パーティーをやります！ イエイ！ 心配しなくて大丈夫だよお、アユもお兄ちゃんもいるからね。誰か誘つてくれてもいいし。じゃあ、今から速攻で来てね。アユが怒っちゃうから。蒼くんの顔に筆で落書きしたいんだって。じゃあ、また後で～』

「…………」

メールが来てすぐ、俺は無言についてなった。何、速攻つて。筆で俺の顔に落書きつて何？ イエイつて何？ 心配はしないけどさあ。

速攻つて事は行かないといけないよなあ。

白亜のメールをしばらく眺める。ギャル文字もなければむやみやたらに絵文字が使われていないシンプルで正しい文のメールだつた。絵文字が使われてたりギャル文字だつたら行く気しねえよな。うん。

と、まあ、それはさておき。

バッグの中に机の上にある財布やら何やらをバンバンバッグに詰め込んで、次に携帯を仕舞い込む。物はあんまり要らないかな。実を言つと情けない事にジャージを着てゴロゴロしてるので、タンスから適当に服を取り、そして上着を着る。バッグを持つたら外出できる格好に早変わり。

実に五分も経たなかつた出来事である。

階段を駆け下り、大急ぎで玄関へ行き、スニーカーを大急ぎで履く。が、紐が解けてしまつたために右の紐をちゃんと結び直す。どうせなら左もやろうかと思い左も結びなおした。

玄関の靴棚の上に乗つかつている鍵ケースに勢いよく手を突つ込み、自分の自転車の鍵を取り出した。

母さんの声が聞こえないという事は俺がグウタラしている内に買物に出掛けたのか。ちなみに父さんは魚釣りに早朝から出掛けている。後輩や先輩達と一緒にな。

「……いつてきまーす」

誰も居ないが一応小声で挨拶。その後静かにドアを閉め、鍵をかけ、鍵をちゃんとかけたよな？ と物静かに確認してからダッシュで外にでる。

俺の家の門に無造作に置いてある自転車の鍵を大袈裟おおげさにガチャガチャと解き、自転車に跨る。ママチャリじゃないぜ。マウンテンバイクっぽい。俺はよく解らぬけど父さんの趣味だ。俺のだけだ。

「よしひ

面倒くさいので、籠かにしつかり入れないで取つ手つて言つのかな、それに掛けた。

用意ができたら後は全速力で白亜の家へレツツゴー。全速力つてのは必須。亜夕が怒るからさ。

「遅い！ 遅い遅い遅い！ どんだけ筆を持たせてたと思つてたんだ！」

亜夕の罵声がとんだのは、俺が白亜の家のリビングにたどり着いた時だった。

玄関の側の呼び鈴を鳴らし、ロリコンお兄ちゃん（俺の思いこみだが）が俺を招き入れて、リビングにたどり着いたと思ひきや覗すずりと筆を持つてオーラをメラメラとさせている亜夕の姿が在ったのだ。

それで、俺は「遅い遅い」と怒られたわけ。

適当に「すいませんでした」と謝罪してからまずは新年の挨拶をお兄さんと白亜と亜夕にする。キッチンに面する若き白亜のお母様にも挨拶をして、上着をソファに置かせてもらつた。

白亜のお母さんは、若い。まだまだ美人さんだ。長い髪と優しい表情が亜夕に怒られてしょんぼりとしている俺の心を癒した。でも、

怒鳴り散らしてくる亜夕の事を怒つてくれてもいいだがつ。 小声で問いかけると、

「亜夕ちゃんは昔からそつなのよ」と、ほやーっとした返事が返ってくる。 それでいいんかい。

お兄さんは私服だつた。白亜はまたどびきり可愛くお洒落してい、いつものツインテールがツヤツヤしている。ワックス？ ピンクでフリフリのワンピースは白亜に似合つているぞ。

「で、ええと、蒼くん。アユが待つてたから……ね？」  
「ね？」 つてなんだ。話を急に変えられても困るぞー。

「アユ、うん、書いちやつて。何書くの？」

「今年は丑だから牛かなー」

亜夕が子供っぽく目を輝かせて、何を書こうか考察する。ああ、今年は牛年だよなあ。牛肉食いまくるぜ。ワクワク、ワクワク……つて、これは要らん思考だ。

「ちょ、ま、あゆ、う！ やめ、やめ、やめい！ それ洗濯して落ちる墨だらうな？ 顔洗つたら落ひるよな？ 本音言つと、書かないでくれえ！」

「それは無理な要望だよ蒼くん」

「慣れない口調使つて誤魔化すな！」

「あ、蒼くん。多分それ落ちない」

「マジですか。とりあえず書かないでくれ。

「優輝。アオを抑えてくれないか

「了解」

「了解じゃねえええ！ お兄さん、何年下の言ひ方をあつてるんですか！」

「妹以外にはうなんだよね、僕」

「驚愕の新事実！」

「そうそう、お兄ちゃんつて『ド』うなんだよね、サディスト」

「うひああああああああ！」

お兄さんには羽交い締めにされる。それも一瞬一瞬爽やか笑顔で。うなんですね、うなんですね！ 周りにうが多すぎて困る。このまま俺の精神がどうにかなりそうだ。いつしか周りの物全てが「う」というアルファベットに見える事になるだろ？  
すまん。それは嫌だ。勘弁してくれ。

すぐ落ちる墨だつたら落書きしてもいいさ。だけど白亜が言つては洗つても落ちない墨なんだろ？ 帰る時俺はどうなるんだろうね。落書きされた顔を道行く人に面白がられるか。冷たい田で見られるか。どっちも嫌だぜ馬鹿野郎。

「なーにを書こうつかなー」

もう、好きにしてくれ。真つ黒でもいいぞ。

「とおつー」

亜夕の要らないかけ声と共に、墨がたつぱりと染み込んだ筆が勢いよく構えられた。

その筆は宙を舞い、俺の顔面に近付く。

実際に一瞬の事だった。生温い、ヌルヌルとした感触が俺の顔を這いざり回る。田の前に見えるのは、亜夕のニヤケ面。それにしてもお兄さん、瘦せてそうなのに意外とガツチリしてるんですね……。関係の無い事を思うという事はそろそろ俺は危ない。

白亜は亜夕の後ろで必死に笑いを堪えながら心配しているフリをしている。ひでえな。

「はいなー。出来上がりつ」

亜夕が、筆の墨が跳ねた顔を服でグッと拭いてから汗も拭いた。んな、大袈裟な。

「おおおー」

お兄さんと、白亜の歓声があがる。あ、もう一人。白亜のお母さ

ん。

「亜夕ちゃんは、絵が上手いのねえ。」の蒼くんに書かれたのなんか蒼くん」と発表会に出してもいいんじゃないかしら」

何を言つてるんですか。

「アゴ、これは芸術だよ、芸術！」

「そういうえば亜夕くんは絵が上手いんだよね」

「やっぱりそう思つか？」

「蒼くん、鏡見てみなよ！ 格好いいよ！」

「この状況にキヨトンとするしかない。白亜が小さい手で小さいポシショットから手鏡を出して、俺のほうに向けた。鏡に映る自分の姿を見る。

「……おおー」

すじいぢや、これは。

ちなみに丑年だが、頬に書かれたのは竜だった。書くスピードはとても早かったのだが、何か芸術的な竜である。日本の屏風や和紙に書かれてそうな竜だ。男子から見たら格好いいだろ？ 更にちなみに、墨は乾きかけている。

「すげえな、これ」

「丑にしたかつたけど、ダサいから。優しいオレはさすがに丑を書くのは酷いかなーって思つてな。牛肉を書いてもよかつたぞ。恥ずかしい皿にあうだらうけどな」

「こら。

「入れ墨みたいで、格好いいんじゃないかな」

羽交い締めにするのを止めて、お兄さんはフォローしてきた。  
まあ、いいんだけどさ。

## 新年修正フォーム（後書き）

新年編は、次に続きます。

今年も、去年と同じかもな。

そんなこんなで、俺は頬に龍の入れ墨のよつな物を残しながら白亜のお母さんとのても美味しい料理を口に運ぶ。さつき俺の母さんに「友達の家に居て、新年パーティーをやってるんだけど帰り遅くなつたらごめん」とメールを入れたが……夕方からこんなに喰つて大丈夫だろうな？ まあいいや。母さんには夕飯は友達と喰つてたと言えばいいしな。

今の時刻は五時。あの顔の落書き事件の後は亜夕と普通に羽子板をやつてみたり（こんな日本人らしい事は初めてだな）、白亜のお兄さんと夕飯の買い出しに言つたり……白亜と戯れてやつたり……。つーか俺、ちゃつかり席に座つて食事をしているが大丈夫なんだろうな？ 多少心配。

「あははー、大丈夫だよ蒼くん、ご飯は人が多い方が楽しいしねっ。お母さんの料理は美味しいから、遠慮せずに食べてね」

「白亜のお母さんは食べないのか？」

するとお兄さんがニツコリと微笑む。「父さんが今日夜遅いんだよね。母さんは父さんと晩ご飯食べたいらしいから、僕達よりも遅くなると思うよ」白亜の代わりに解説してくれた。その後にドンドン食べてねと付け加えてくれる。

うーん……じゃ、遠慮無くドンドンいただくぞ。

亜夕は亜夕で毎年こうやって此処で新年を過ごしているのか、慣れた様子でシャンパン（苺味、アルコール無し）を開けようとしていた。が、蓋が上手く静かに開けられなかつたらしく蓋を天井まで

飛ばし、飛んでいった蓋にビビッて「のわっ」と声をあげていた。

何がしたいんだろうね、コイツは。

白亜はステーキを豪快に頬張っていた。肉が上手く切れないのか肉が餅のよくなじむのびる。「うわーん、固ーー」とか言につつも噛みあわうとするのを実行。何やつてるんだ、こいつも。

お母さんがバランスを考慮してくれて俺の好きな焼き魚を皿に出してくれたのだが、白亜と亜夕と皮嫌いといつ自己中心的な意見によつて俺の皿には今現在魚の皮が盛られている。魚の皮だけでもイケるぜ！ つて人、募集。

「もうすぐで学校だねー」

白亜が残念そうに言つた。肉を噛みきる事は諦めたらしい。

「んー、そうだな」俺もちょっと残念そうに言つてみた。二人のお守りは面倒だが仕方ない。「生徒会は何か企画してゐる事とかつて無いのか？ ドッヂボールとかさ」

「無い」

「あ、そつ……」

亜夕は苺のシャンパンをトクトクとグラスにつきながら「イツと笑つて「まあオレが『ねえねえお兄さん、お姉さん、ドッヂボール企画をやりたいんだけど……』とか言つたら採用されるかもな」と言つた。最もだ。

「じゃあ言つてくれよ。最近学校で何も企画がねえじゃねえか」「猫なで声であんな奴らに企画をお願いすんのなんてまっぴらだね」そうですか。……つて先輩の事をあんな奴らつて言つちやいけません。

「別にいいだる。アイツ等が生徒会に入つた目的は内申を上げる為なんだから。……うわっ」

ギリギリまでつづいて失敗したのか、苺のシャンパン（何度も言つたがアルコール無し）をこぼしてしまつたらしい。亜夕は慌てて近くにあつた台布巾でテーブルを拭いた。

そして拭きながら、「いつかオレが生徒会のトップに立つつもり

だけどな」とか何とか言いやがった。さつとトップイコール生徒会長であるつ。

美味しいかつデカいロールキャベツを頬張りながら俺は亜夕に訊く事にした。

「なんで生徒会に入つたんだ、亜夕は」

「アコは生徒会に入つて注目集めて、人気者になりたいんだよねー」

「もう人気者だけどな」

その通りだけどなんかお前生意気だな。

亜夕達と楽しく話しながら豪勢な食事を済ませた後で、白亜の兄さんは宿題をやるからと黙つて自室で宿題をやりに行つた。俺はとりあえず六時半になつたら帰る事にした。亜夕はもう少し留まるらしい。亜夕の家は白亜の家のすぐ前だから、余計な心配は要らないといふ事だ。

俺はすぐ帰らないと母さんがつるさこからな……。まあいいんだけどや。

ところで、いつか亜夕がとても可愛い服を無理矢理着せられた時に公開された白亜の部屋だが、相変わらずだつた。

男の俺はやはりよくわからないのだがラブリーと言うべきなのかキュートだと叫うべきなのかよくわからない。だけど女の子らしくて可愛い部屋だというのはわかる。

その白亜の部屋で俺達は学校での事を話したり、まあとにかく戯れた。

そんであつとこつ間に六時半。食事を開始したのが五時で、終了

させたのが六時だから白亜の部屋で三十分は戯れていた事になる。あつという間だった。

リビングのソファに置かせてもりつていた上着を玄関で羽織り、靴を履いているとお兄さんが一階から下りてきて、「帰るの?」と言。

白亜のお母さんも、白亜も、亜夕も玄関まで来てくれた。

「また来てね、蒼くん」

是非来たいですね。

「学校、楽しみにしてるよ」と、亜夕。それはどういう意味なのかわからないがどうせ「鞄アタックを楽しみにしてる」という意味であろう。そんな「いつと笑う亜夕の隣にひょこつと白亜が出てきて、「また来てね」と言つてくれた。

「(ご)馳走様でした」と丁寧に挨拶してから、ドアを開け、外に出る。まだ夕方なのに外は真っ暗だ。一段と寒いし、息も白くなりやがつた。

……思えば。去年は楽しかった。

亜夕と白亜が話しかけてくれなかつたら今頃『友達』じゃなかつたかもしれないし、俺は今頃ひとりひとりだった。冬休みもいつまでも外に出すにゴロゴロしてただろう。

亜夕達には感謝しなきやな。今年も全力で一人をサポートするか。

「今年も楽しくなりそうだ」

## 今年も、去年と同じかもな。（後書き）

お待たせしました、新年シリーズ2です。もう新年と言ふ日ではないような……。思えば私の更新つていつも遅いような。時間がけすぎているような。

新年シリーズの続きなので、大分短くなりました。8000文字以上書いた事のある私。それが今はきっと4000でしょ？ それにも満たないかも。

私的には8000文字以上書きたい私ですが、どうにも時間がとれないでので。

一般的な小説は、オンライン小説よりももつと文字数がありますからなるだけ文字数を多くしたいのですが私の力量不足です。描写をもつと入れたほうがいいのかな。

そして皆さん！

ロリショタ！ がアクセス数10000に近づいています！ 一万ですよ、一万。……いや、まだまだ上を目指したいのが山々なのですが私はこれだけでも喜んでしまいます皆さんに何とお礼をしていいのや！

とにかく、ありがとうございます！

では、これからも応援よろしくお願ひします。次の目標は文字数8000を越える事です。

遅れましたが、明けましておめでとうございます。あれ、もつもんな日じゃない？



あつという間に冬休みが明けてしまった。

亜夕と白亜と、白亜のお兄さんとの新年パーティーを楽しんでから徹夜で宿題を頑張ったが正解率は低いだろう。まあ、良い。宿題は『やる』だけだし、やればいいだけだし……提出するりやあいいだろ。

今日は冬休みが過ぎて始業式を迎えてから三日目の朝のHR。冬休みの長つたらしい宿題を先生に提出して、そこで先生から「大神くんからお知らせです」ときた。

だるすぎる所以机に突つ伏していた俺だが、生徒会役員の亜夕がHRで黒板の目の前に立つという事は生徒会がまた何かを企画したという事なので、とりあえず寝ないで聞く事にした。俺がゆっくりと体を起こしていると、一番後ろのドア側の席の亜夕が体に合わない大きな椅子（亜夕にとつてだが）から立ち上がり、ツカツカと黒板の前まで行く。

それまでに女子がキヤアキヤア騒いだりする。亜夕の人気度は半端ないな。その亜夕の彼女である白亜が一番騒いでいるけどな。

先生の教壇を勝手に占拠し、皆の前にズンと立つ亜夕は凜々しい。先生、教壇の件でツツコミは入れないんですか。

「本校にてバスケットボール大会を行う予定だ。皆、聞いてくれ」

「おー！」

「こまみにこの雄叫びはクラスのものである。亜夕の威力は絶大。

「えー、生徒会が企画したバスケットボール大会だが、トーナメント戦になつていて、クラスで幾つかのチームに分かれて戦うという事になつた。それで今日の学活の時間にでもチーム分けをしたいと思う。自由に組んでもらつても構わない。ただしそのチームには必ずバスケ部所属の生徒を何人か加え、バスケの練習タイムにはその

所属生徒に教わってほしい。練習期間は決まってないが……」

「とりあえず、しっかり参加してほしい。いいな！」

「ハイ、亜夕さん！」

こまみにこれも俺以外の全員の台詞。某有名怖い系テレビの台詞を皆は真似してよく使うのだ。またも亜夕の威力は絶大。

……バスケ、かあ。

中学時代には体育のバスケの時間に顔面でボールを喰らって笑われた事があるつけ。未経験者なのに皆は容赦ないプレイをしてくれたな、うんうん。俺は全くのバスケ経験無しだ。他のスポーツは得意だつたりするが、バスケになるとトコトン駄目で、苦労する事が多々ある。

亜夕は先生を無視して皆と一緒に雄叫びを一通りあげてから席についた。先生はこういう事に慣れてしまっているらしく、もう何も注意しない。むしろ亜夕を可愛がっている。それは教師として良い事なのだろうか……。

そういえば亜夕はチームには必ずバスケ部所属生徒を入れるって言つてたな。どうせ俺と白亜と亜夕で小さなグループができるが、その中にバスケ部の生徒が入つてくるつていう事だよな。このクラスの奴が入るんだが、一体亜夕と白亜は誰をセレクトするんだろうな。

白亜は女子一人だと可哀想だよな。女子を入れたほうがいいかも。あ、でも白亜つて以外とそういうの気にしないよな。男子には人気あるし男子慣れしてそうだし。

男が来てもウザいだけかな。熱血野郎が来たりしたら困るぜ。マイワールドに入つていると、すぐさま先生が定規で頭をペシンと叩いてきた。当たり前か。

「いたつ」

「アオくん、一時限目は数学ですよ。ボーッとしてないで用意しな

「わい」

「先生までアオって呼ぶんですね……俺の名前は蒼あおですってば」「知ってるわよ。でもアオのまつが面白くて可愛い名前じゃない?」

若くて綺麗な先生だ。独身らしく。

先生はロングヘアを揺りしつつ、ニコニコと微笑んで教室を出でた。

が、おこおこ、名簿を忘れているだ。

「先生一、名簿忘れますよー」

学活の時間になつた。数学や古文やらを適当に受けてからの学活の時間はとても眠いのだが気にしない事しよう。眠さなんですが、消えるさ。

時間が余つたらバスケの練習をするらしいので、俺達はジャージに着替えた。体育館でチーム分けを行うのではなくばる此処へ来たといつ事である。ちなみに今は一年が此処を陣取つていて、他の二三年は授業中だ。

三年生は受験のため、やりたい奴が参加というシステムらしい、

二年と俺達一年は強制。

と、説明してくれた亜夕が俺の前へいきなり来て、来るなり「ゴールにボールが入らなかつたらおまえのせいにするからな」と言つてきたのはその時である。

俺とチームを組みたいという事だらう。ソフビのチームになるのは知つていたし、別にイヤではないから反論はしない。

亜夕の後ろに白亜がくつづいていた。白亜も俺のチームに入るんだな。

「チームを組みたいって事だろ? 反論はしない。『使命』だし

な

「うんうん、アオも大分成長したな」

亜夕が一人で納得し始めた。

そんな亜夕の後ろで白亜はもじもじしている。ん、どうしたんだ。

「白亜ね、バスケ苦手なの。一度もショートした事ないし、ボールキャッチできた事もないし……」

「そ、そうなのか」

「うん。だから蒼くん、よろしくね」

「あ、ああ。でも俺もバスケって苦手だし、専門用語とか知らねーしなあ」

白亜の役にたてない事は非常に残念である。畜生、バスケくらいなんできかないんだ俺。……まあ、俺を責めても仕方ない。バスケが得意なバスケ部所属生徒を一人でも入れりゃあ良い。実際必ず入れるというルールだし。

「あ、えっとね、白亜がバスケ部の人誘ったんだ。男の子だと男の子が多くなっちゃうから女の子を。駄目だつたかな?」

「白亜がそういうならオレは別に性別を気にしないから」

「亜夕に同意」

すると俺達の意見に白亜は二コリと微笑み、後ろを向いた。「朱音ちゃんあーんつ」白亜は確かに女子を誘つたらしい。朱音という女子という事は……

「ボール持つてきたよ。チーム決まったところから練習していくつ

て。うちの体育館広くてよかつたね。……あ、えっと、亜夕くんと

白亜は私の事知つてるかな。黒崎朱音です。よろしくね

「あ、よろしく……」

知らない筈がない。彼女は黒崎朱音くろさき あかねだった。

黒崎は、新鮮な空気が沢山つまつてバウンンドしやすいボールを持つてきた。練習する気満々だ。

黒崎朱音について説明を入れようと思つ。

黒崎朱音は、バスケットボール部所属生徒。俺と亞夕と白亜と同じクラスの美少女だ。成績は学年の中でのトップクラスにいつでも部位し、テストでは高得点が当たり前。その上美少女ときたもんだから、コイツは天然記念物でも良いんじゃないだろうか。肩までの髪はサラサラな黒い髪で、最近の女子達のように染めたり、飾つたりという事は決してない。美少女、成績優秀それプラス運動神経抜群。ヤバい、天然記念物として本格的に保護した方がいいのかかもしれない。

黒崎は他の男子にも人気がある。それでも口リが有力になつてしまふのか白亜ファンクラブ会員のほうが多いのだが、黒崎ファンクラブ会員の量も負けてはいない。黒崎は自分のファンクラブが設立されているという事に全く気付いていない。天然記念物じやなくて本物の天然か？

でもそんな天然さんだとしても、俺のタイプだということに変わりはない。スポーツをやつているときの彼女はとても可愛くてありのままの『黒崎』というかんじがするし。スポーツで彼女が得意なのはバスケに限らずソフトボールでもテニスでもマット運動でも何でも来いらしゃいじゃないか。一番得意なのはどうやら球技系でつておい。

なんで俺はこんなに黒崎について熱く語つてんだよ。今はバスケの練習だろ？ それが優先だろ？

「…………」

無言になる。手の汗がひどいことをい今更ながら悟る。  
あー、もしかして、俺、さ、

黒崎の事、

「蒼くうーんっ、早く早くー！ 練習終わっちゃうよ」

白亜の声がかかつてきた。

どうやらすっかりお得意のマイワールドに入つてたらしく、白亜達とだいぶ遠ざかつていたらしつ。俺は早めに歩き、白亜達の所へ戻る事にした。

「「めん」めん」

慌てて戻ったのにも関わらず亜夕が「トロい奴め」と呟つてきた。  
短気だよ、お前。

どうやら、大きく広がつて円を作り、バス練習をするらしい。

黒崎の話によるとバスケでバスというのはとても大切で、バスができるいいないとバスケの試合中困るらしいのだ。「まずは基礎」という事か。

黒崎の言つとおり、いきなりショートの練習つてのはいけないよな。亜夕がショートの練習だショートの練習だと騒いでいたがやはり基礎からチマチマと。

黒崎の言つとおり、バスの練習をしつかりと、

……つて、ちょっと待て、俺。わつきから黒崎黒崎黒崎黒崎黒崎黒崎うるせえな。

「いーい、皆。知つてる人も居るかもしけないけど聞いてね。バスの時つていうか、ボールを渡したりする時は目の前で手で三角を作りまつ。そうしたら押し出すようにいー……投げる」

黒崎の「投げる」の台詞と同時に、ボールは亜夕に投げられた。  
亜夕はボールをキャッチした。

「よつ、と

「やうそ、キャッチもしつかりー。亜夕くん、白亜に投げてみて  
？」

亜夕は小さい手で円らな瞳の前で確認するかのように三角を作つてみて、ボールを持つて白亜に軽くバスした。彼氏のバスを微笑みながらキャッチするのが白亜。

白亜がボールを持つとボールが大きく感じられる。「うわふつ」とかなんとかいいながらダブダブのジャージの袖を揺らして、しつかりとボールを抱き締める。抱き締めていいのか？

「上手上手ー。三角、忘れないでね。それじゃ、白亜が蒼くんに

「……えいつ」

白亜が投げたボールはテンテンテンテンと五回バウンドした

がちゃんと俺の方へたどり着いた。ボールを投げた時の白畠が可愛らしかつたので思わずニヤケそうになつたが、ニヤケたらニヤケたで亜夕「すつこんでる幼児マニア」とか言われそつたので抑えておく。

「白畠、上手い上手いー」

え、良かったのか、アレでも。

「じゃ、蒼くん」

自分に向かつて投げろという事が。黒崎がチヨイチヨイと手を動かして、ボールを投げるよう指示した。投げるしかない。だけど、なんかドキドキするのは何故だろう。たかが女子にボールを渡すだけなのに、パスするだけなのに何故か鼓動が早くなるのだ。

……ありやりや、俺、どうしちゃつたんだろうね。

仕方がないから言われた通りに手で三角を作つて投げる。白畠よりは綺麗に相手にボールが渡つた。バウンドしてないし。

おずおずとボールを投げた俺に向かつて黒崎はニッコリ微笑んでボールをキャッチする。「うんうん、皆上手だね！ 練習は要らな

いかな？」向日葵のよう元気で可愛い笑顔だった。白畠とは違う笑顔。

参つたな、これから学活が楽しみだぜ。

「よ、亜夕、何ボールとしてんだ？ 限定じゃないけどメロンパン喰いたいとか言ってただろ？ 早く行こ。金が無いとか？ だつたら奢つてやるよ」

授業が終わって食事タイムになつたところである。

余程授業がつまらなかつたのか亞夕は机にキスでもしているのかと思つてしまふ程の体制で突つ伏していた。突つ伏してゐるなと思つが早いが俺に反応し、体をダルそうに起こす。

白亜の姿が見あたらないが？

「白亜は何処だ？」アイツもメロンパン喰いたいって言つてたよな。限定のメロンパンがでるのはもつすぐだな。その日は奢つてやるか。

……白亜は？

話が反れてしまつたので一回訊く。

「……トイレ

「トイレか、そうか。じゃあ待つてやる。一人にするのは可哀想だしな、ははは」

「……

何故か亞夕が冷たい視線を俺に送つてきた。かーなーり、冷たい。ダルそうに立ち上がりつて亞夕は下から俺を見上げてむすーつとした仏頂面を見せる。「お前、変だぞ」バスケ練習の時からおかしいな、と付け加える。

「おかしい？俺が？なあに言つてんだよ、亞夕。いつもの俺だろ？」あ、白亜來た來た。早く来いよ、廊下で待つてゐるから

「そうじやなくて

「え？」

「なんかいつもよりお前、明るいぞ。優しいのも含めて。おかしい。キモい。ウザい」

「何を言つてんだ、亞夕。俺は健康だ。さあ、早く食堂行こうじゃねえか

「……はあ？」

「なあんか蒼くん、変だよ？」

俺が奢つてやつたプリンとメロンパンを交互に食べながら白亜がそつ言つてきた。思うけど、白亜の昼食つていつも菓子パンだつたリスイーツだつたりする氣が。

俺は首を傾げた。でも、ちょっと機嫌が良いのかもしれないけど俺は至つて普通である。

「機嫌が良すぎてキモいぞ、お前

「ええ？」

「機嫌が良すぎてキモい？ どういう事じや。

「ええーっと、口リとショタのお一人様？ 言つてる意味がわからなーのですが……」

「もうつ、蒼くんの馬鹿あつ。蒼くんつて結構格好いい方だと思つよ？ うん、実際女子も格好いいとか言つてるしね？ でもさあ、なんかニヤニヤしているというか、顔赤いというか、……へ、変……」

「白亜に異議は無し。お前……どうせやつたんだ、アオ！ 今だからこそ言えるけど、お前、結構普通の男子よりはイケてる方だつたのに……！ あああ、キモい、キモい、顔赤い顔赤い何に照れるんだコイツら！」

「キモいキモい言つのは人権がどうのこうので良くないぞ、亜夕くんや。それと、口の中のメロンパンを人に飛ばしてこないよーつには、話し方がいつも蒼くんじゃないよう！ なんか、バラ色のオーラが漂つてる！ う、うわああああああん！」

「席を変えよう、白亜。こんな気持ち悪いバラ野郎の傍にいたら感染するぞ！」

亜夕と白亜は席から立つて席を変えようとする。え、え、え、何？ キモイって何？ バラ色のオーラ？ な・ん・じや・そ・りや。この台詞の後に「つけてもいいぜ？」

「う、うあああああああああん！ うああああああああん」どういうわけか白亜が泣き出しちまった。嘘泣きではない。大粒の涙が瞳からポロポロと溢れ、顔を擦りながら泣く白亜。そんな

彼女を見て野郎共が集まってきた。泣いてから数秒の事。

「ドヤドヤと群がり、「白亜たんじつしたの?」「白亜たーんつ」などとぼざきやがる。」の野郎共白亜の中に入り、白亜の前に立つるな? クソ男達め……。

「元々一人を守るというのが俺の使命だが、俺は白亜を『女の子』として守つてやらなければいけないような気が何故か（本当に何故かなのだ）して、群がつている野郎共の中に入り、白亜の前に立つた。

「よせ、お前達のような豚が群がると白亜がもつと泣いてしまうだろ? もっと紳士的な振る舞いはできないのか?」「な、なんだ? イツ……」

「一年の『アオ』つて奴か?」

「ああ……皆さん僕のことを『アオ』つて呼ぶんですね。僕の名前は顔面蒼白の蒼と書いて『蒼<sup>そう</sup>』と読みます。以後、お見知り置きを」

「顔面蒼白? なんじゃその笑えない冗句は<sup>じやうく</sup>」

「こんなやりとりをしていると亜夕が後ろでジャンプしながら、「アオ! 何やつてるんだ! アホか、お前はあああああつ! 白亜ファンクラブに何か言うなんてお前はホントに馬鹿すぎて、」

「ジャンプする亜夕くん可愛いー! 今度こそ我が新聞部のインタビューに答えてもらうわ!」

「……へ? あ、ちょ、放せ! 放せえええええ!」

亜夕に何が起こったのかは解らないが、新聞部一同に持つていかれてしまったのだろう。可哀想に、亜夕。研究材料になるだろうな、きっと。だが哀れに思つるのはやめよつ。俺の行動に指図する者は居なくなつた。

とりあえず野郎共を散らさせなきやな。白亜が怖がつてしまつ。

俺は一步も動かなかつた。シーンと沈黙している間途中で俺は「何やつてるんだ、自分」とか思つが俺の行動は正しい! レディーを泣かせる奴は許せん!

「貴様等、白亜ファンクラブ会員のくせになんて野郎共だ！ 白亜ファンクラブに所属するならもつと紳士的な振る舞いを見せてみろ！ 見る、このこちんまりとした白亜を……お前たちが汗ばんだ手を差し伸べるせいで白亜がすっかりドン引きではないか。いいか！ レディーの心配をする時はだな！ 優しく手を差し伸べる！ 大人数で行かない事。せめて行くのであれば順番で！ そう、レディーという物はだな、儚い光のよつたな物で小動物のよつたな存在！ 貴様等レディーをなめんなよおおおおおおおっ！」

ここまで言うと白亜ファンクラブ会員達は諦めるらしい。そして自重したらしい。自分の間違っていた行動、そして汗ばんだ手に。皆自分の手を見ながら退場していく。当たり前ではないか、ふははは。ズバリ俺の勝利だ。

「ふはははは、ふーっはははははは、

「何、何があったの？」

刹那。

俺の雄叫びをかき消したのは白亜ではない他の女子だった。俺と白亜ファンクラブ会員達が起こした騒動に気付いたのだろうか。まあ、皆気付いているかもしねりないが。

その女子は肩に届くくらいの髪の長さ。こまみに、黒くて艶やかだ。円らな瞳。体育系と断定できそうな体つき。そして更にこまみに余計な事としてな貧乳。野菜のサンドイッチを持って、去つていく男共をポカーンと見つめていた。

「く、く、くくくくく、黒崎！」

**黒崎朱音。**学活のバスケット大会練習の時にバスを教えてもらった心ときめくキュートスイートエンジェル。そのキュートスイート。エンジェルは俺に向かつて疑問符を沢山投げてきた。

いつたい何が起きていたの？ みたいな。とりあえずとつてもキヨトンとしていて、……というよりかは俺にひいているのかもしない。

ビックリしているのは俺だ。なんか今日覚めた感覚なのだ。今ま

で夢を見たいたよつた。

「は、白亜、どうしたの？ ファンクラブの会員達がまた？」

黒崎はそう言いつつまたキヨトンとしながら白亜に問いかけた。

白亜は涙目で自分よりもずっと身長が高い黒崎を見上げる。「うん……。あ でも、蒼くんが助けてくれたんだよ」 その後に白

亜は「でも白亜何もされてなかつたよつた」と付け加えた。

「へええ、蒼くんつてすういんだね！ 白亜ファンクラブの人たち は白亜の事が大好きなんだけれどちよつと強引で私も嫌かな。蒼くんはすうごかつたのかもー。私はさつきの事、あまり知らないど

「あ、おお、そうか」

おどおどしていた俺は、

「ごめん。なんか騒いじまつて……。俺も自分で何してたか解らな いんだ」

「蒼くん、もつとの事はいじよ。白亜、嬉しかつたよ

「いやはや、一件落着～。ではでは私は昼食をとつてきまーすつ。

じゃあ、後でね

「あああああ、ああ、うん、また

「なんでか知らないが「はあ」とため息が出た気がする。

その後、フラフラと亜タが帰ってきた。フラッショを沢山浴びて インタビューを受けていた事は言つまでもなく。

授業も適当に受けて、ダラダラと帰宅の用意をし、たいならの号 令がかかり皆が机を動かしはじめた時、白亜が俺に何やら小さい手 紙を渡してきたのはついさつきである。白亜によると、「今見て だそつだ。紙をチラッと見る。中には白亜独特の可愛らしき丸字 で、『お掃除が終わつたら、体育館裏に来てください』と書いて あつた。

「…………」

無言。当たり前だ。

え、何、これ。まさか愛の告白だつたりしないだろうな。困るぜ

それは。第一白亜には亞夕といつ生意氣ショタ彼氏が居るだろ？

「……愛の告白、じゃないよな」

当たり前だ。亞夕と白亜は昔からの仲だそうで、あのバカッフル  
加減はとてもではないが言い表せない。亞夕の白亜に対する甘さと  
言い、白亜の亞夕に対する惚れ度と言い。

どうしたんだろうな。

## 黒崎朱音といの恋日（後書き）

新キャラです……！ 黒崎朱音です。

実を言うと朱音編が終わったら朱音をレギュラー化して、また新キャラを予定しています。予定、ですけどね。

16000文字近くなりました。まだまだ短いなあ。

## 白亜式・居眠りチヨノノートレッスン

「白亜の呼び出しに、疑問。

「えーと、白亜？俺を呼び出したのはいいけど、用件って、何？」

おずおずと挙手して、そしておずおずと聞いてかけてみた。  
白亜の事だから何か理由があるのだろう（と行つても呼び出すべ  
りいだから理由は必ずあるのだが）。いはりも真剣に話を聞いてや  
らねばならない。

何か、心配事とか悩み事が在るのだろうか。女の子だし、思春期  
だしな。心配事や悩み事が一つや一つ在ったところで何もおかしく  
はないし。

冷たい風にふかれながらもしばし沈黙。小柄な白亜は下を向いた  
ままふるつと震えたので、俺はブレザーをかけてやつた。

ブレザーをかけてやると、沈黙していた白亜が小さく口を開く。  
「あのね、蒼くん。お話というより訊きたい事があるの」背伸びし  
て小声で耳元に囁いてきた。白亜の甘い吐息がかかるのが解る。

「訊きたい、事？」

「うん」

「何？」

「うーん……」

何が『うーん』なのか解らないが、多少唸つた後彼女は俺にぎゅ  
ーっと抱きついてきた。寒かったのだろう。

白亜は身長が低いためか白亜の頭が来るのは俺の胸と腹部の間だ  
った。

「白亜？ あ、う、あ……」

「寒いの？」

「亜夕に見られたらどうなるか」

「……止めとく」

パツと離れ、白亜は俺を見上げた。

「あの、唐突だけどね。言つよ？ 言つからね？ ……ああ、もう言つちゃうもん！ ……蒼くんつて、好きな人居る？ 居るよね？」

「え」微妙に一文字だけ発した。白亜の台詞、疑問に何て答えればいいのか解らない。だつてこんな事いきなり聴かれたら困るだろう？ 好きな子か。今まで俺は亜夕と白亜の『お世話』で忙しくて恋をする暇などなかつた。十分青春はしていた（多分な）だらうし、それなりにキツくも楽しい毎日だから自分の恋愛なんてどうでもいいと思つてた。実際、俺じやあまともに恋愛なんかできないだらうし。あ。でも。

よくよく今日を振り返つてみると何かが違つた気がする。甘いかんじ。それは自分でもよく解らないのだけれど、とにかく今まで感じた事のない感情だつたと思う。いつもの「楽しい！」とかじやない、別の感情。

「えーと、」

「白亜、見ててわかるよ」そう言つて白亜は俺を見上げる。「朱音ちゃんの事、好きなんだしょ？」

白亜の満面の笑み（笑みというよりかは「にまーつ」だつたかもしれない）を俺は一生忘れられないだろう。

白亜が満面の笑みと共に放つた台詞は聞き捨てならねえ。いろんな意味で。俺は『その台詞』に即座に反応していた。

「え？ ……あ、おあうあわああああああつ！？」

考えてみれば確かに。黒崎朱音という人物は知つていたは知つていたが、いざ詳しく知り合つて行動を少し重ねただけで、黒崎と親しくなつた俺はその後フィーバー状態だつたかもしれない。有頂天？ 「バスケ練習の後蒼くんなんだかおかしかつたし……あ、でもファ

ンクラブの強引な人達から助けて？ もらつたのは嬉しかったよ。  
ありがとう」「

白亜は微笑んで、

「というか、その反応は図星だよね？ 別に白亜は蒼くんが朱音ちゃんの事好きだから嫉妬とか、駄目だとか言つてるんじゃなくつて、その、なんか寂しいなつて。あー、うーん、寂しくない寂しくないよつ！ 蒼くんの事精一杯応援するからねつ」

「あ、う、おお」

俺が黒崎の事好きだつていう事は確定されてるんですね。わかります。

「蒼くんの事精一杯応援するから、ほら、白亜とアコの事も今以上に応援してほしいな、なあんて」

「それはわかつて。俺の『使命』じゃねえか」

「……そつか。良かつた！ ジゃあね、お願ひがあるんだけどいいかな！」

白亜が「ついてきて」というので俺は言われた通りにする事にした。

何処に行くのかはサッパリだが、学校の門から出づにまた校内に入つたからきっと学校に何か用があるのだろう。

亜夕関連か？ と思つたが亜夕は生徒会主催バスケ大会のミーティングがどつたらこつたらで生徒会室に居る筈だ。ちなみに会議中は生徒会の生徒以外入れない事になつてゐる当たり前だが。

白亜は自分に合わない少し大きめの上履きをキュッキュッと鳴らせながら歩いている。そのこぢんまりとした白亜の後ろについていく大きい男が俺だ。別に俺は特別デカいというわけではないが、白亜と並ぶと俺がデカく見えてしまうという仕組みだ。

キュッキュッと二人で歩いていると（正確には白亜が音を鳴らし

てこる）、白亜が後ろを振り向きながら、

「もうすぐバレンタインでしちゃう？」

と俺に呟いてきた。

「バレンタイン？」疑問に思つたがあまり深追いしない事にする。  
もひ、答えが出そつだつたのだから。何故なら。

……調理室、到着。

ははあ、此処でバレンタインについて何かをやひつといつ事だな。  
バレンタインもうすぐだつけ？ 全然先のような氣もするが、まあ  
いい。

調理室の鍵は借りていたのか、白亜が鍵をポケットから取り出し  
何やらガチャガチャとやりだした。

「開かないーっ」

「わかったわかった、貸せ貸せ」

白亜の代わりに俺ががちやりと鍵を開けた。忍び込んで良いのか  
ね。

白亜は、扉が開くと同時に扉の側の電気をパツとつけ、ルンルン  
で内ポケットからエプロンを取り出した。女子の内ポケットって下  
に在るんだよな。男は胸のほう。

白亜はエプロンを着込みながら、そこらへんに突つ立つている俺  
を見た。「蒼くん、後ろリボン結びして」それには答えるしかない。  
「はいよ」

白亜の後ろに屈んで、赤いエプロンのリボンをきちんとリボン結  
びしてやつた。しかしまあ、思つた事としては白亜つて細い。両手  
で輪を作つたらすっぽり入りそつうなウエストだぜ。

できそつだつたので、試しにやつてみた。俺、危ない。

「はわあつー？」

「細！ 死ぬぞお前！ 食つてんのかよー！？」

俺の台詞とは裏腹に、

「蒼くんのバカアホエツチ！ いきなり何すんのー！？」

「あぎやふうつー！」

突き飛ばされてビンタを喰らつた……！ 当然の仕打ちだ。

ボールなどを並べながら、俺達はしばらくだべつた。

「今日呼び出したのは朱音ちゃんの事で訊きたい事つていう事も在つたんだけど、実を言うと蒼くんにチョコ作りを手伝つてほしかつたんだあ。一人じゃできそうにもないし、誰か見てくれてないとチョコを頭から被つて失敗しそうで。あ、調理室の事は調理の先生に許可もらつたんだ。七時までなら使っていいつて。途中で終わつちやつたならまたやりに来てもいいからつて。

当然だけど、チョコ、アユにあげたの。白亜はお料理とか苦手だから去年は市販のチョコだつたんだ。それでもアユは美味しいって言つてくれたけど白亜は手作りを渡したいなあつて

乙女の純粋な恋心つて奴ですか。

「ファンクラブの奴等に嫉妬されたりしないのか？」

すると白亜は苦笑して、

「されそだねー。あまつたら抽選であげよつかなつ

抽選！？

抽選つて何だ、と思つた俺。白亜はそろそろ作業を始めていて、テーブルの上に用意した板チョコを包丁で細かく切り始めた。

「おいおい、危なつかしいぞ。手は左手は丸くしねえと指切つちまうぞ」

「わかつた～。……あ、そうだ。蒼くんお湯沸かしてくれる？ 白亜お湯恐いのー」

「オーケーオーケー」

俺の指導通りに白亜はチョコを切つていつた。真剣に切つてている白亜の姿は可愛くて、もし彼女が妹だつたり俺の彼女だつたりすれば今すぐぎゅっと抱き締めていたかもしない。とにかく言いたい事としては熱心で健気な白亜が可愛らしいのだ。

……亜夕、不味いとか言わずに喰つてやれよな！

鍋にお湯を入れて、沸かす。沸くまでに時間がかかるので白亜の作業を見ている事にした。

「…………」

「…………」

「…………」

「どうした？」

「指切つちゃった」

「…………」

「おー。

「ちよ、おま、氣をつけろって言つたらー！ チヨコ真っ赤になるぞ！ め湯で冷やして、つてお湯じや冷えねえよ俺馬鹿野郎日本語学べよー！」

「心配しなくて大丈夫だよつ。傷浅いし」

「絆創膏くらいい貼つといった方が良くないか？」俺が心配して。ポケットを漁り、絆創膏は無いかと探していると白亜にその手を止められた。

「本当に大丈夫だよ、ね？ 痛くないしアコが心配しちゃつもん」

「ほほ、恋する乙女は無敵ってか。

無敵といつよりも、白亜なりに苦労して健気に亜夕の為に頑張っているのだろう。絆創膏を貼つた指を見せた方が亜夕が心配してくれてそこから何か壮大なラブ・ストーリーが始まるのでは？ と思うが白亜は心配されるのが嫌なのか。じゃあこれから助けてやらねえぞ。あ、違うか。

何かのネタを脳内でほざいてから、白亜の行動を見ていた。小さい、白亜の手は熱心に動く。たまに指を真つ一つに切りそうな時もあるが白亜は困難を乗り越えチョコを切つていいくのであった。と、くだらないナレーターは必要ないな。

トン、トン、トン、トン、トン、トン、トン。

ゆっくりながらもリズミカルな音である。眠くなりそしだが、眠

らない。リズミカルな音で眠くなる時つてないだろうか。そうだな、例えば俺は時計の針を音を聴いてるだけで眠くなるぜ。

細く千切りに切られていく度に、チョコの香りが鼻孔を擦る。<sup>ひじかくすぐ</sup>アロマテラピー効果付きなのだろうか、リズミカルな音と組み合わせて更に眠くなつたので、さりげなく寝る事にした。壁に寄りかかる。すまん、白亜。

……だが、俺の睡眠を妨げるかのよつとせつつき沸かした湯がもう沸いてしまつた。多少グツグツと音を鳴らしている。そんな音を白亜はすかさずキヤッチ！ すぐさま俺に「蒼くんお湯止めて持つてきてー」と呼びかけた。

お湯を止める？ 火を止めるのではなくて？ まあいいや。火い止めてやろうぜ。

火を止めて、用意してあつたボウルにお湯を注ぐ。そして白亜がそのお湯入りボウルの上にボウルを更に重ね、チョコを入れていつた。そして、ヘラのような物でかき混ぜる。

「実は、これ見よう見真似なの」「そつなのか。ちょっとそんな感じした」「うん。お湯の温度とか適当だしチョコの切り方適当だし」

「ヘラでチョコをかき混ぜながら、白亜は「てへ」と笑つた。

全国の女の子達！ 結局は愛なんだぜ！ 市販のチョコでも、愛が伝わつてくりやあ男は嬉しいつてものなのさ！ ……演説を続けたかつたが、やめておこう。永遠と続きそうだしな。

さて。

白亜に「アルミのカバー的なのとつてー」と言われ、アルミのカバー的なのを取つてやつた。名前はアルミのカバー的なのでいいのか？ 男だから解らん。その命名・アルミのカバー的なのの中に白亜はボウルからチョコを注ぐ。アルミ（以下略）は結構沢山あり、チョコがその沢山あるアルミ（以下略）の中に入つていく。作り方が心配になるが大丈夫大丈夫。多分。

「えつとー、何かトップピングトップピングー。先生がね、コレ使って

いいですよ、つて

わーお、気が利く。

星形の小さな金箔きんぱくだった。その星形金箔を白亜は丁寧にスプーンで掬い、一つ一つにパラパラっとかけていく。そうしたら白亜はポケットからもう今にも溶けて出てきそうなチョコスプレーを取り出す。チョコスプレーか？ まあいい。問題はチューブの中のドロドロのチョコ（推定、イチゴ味）だがそれ以前に順序ちがくね？ 僕が言いたいのは、普通何かチョコスプレーで描いてから金箔だろ、という事だ。まあそれも置いておきまして。

ハートを描いた後、白亜は銀のトレーにチョコ達をのつける。後は家庭科室の冷蔵庫を勝手に使わせていただいて勝手に冷やさせていただいて勝手に待たせていただければ完成。

チョコの完成を待つのはそれぞれ家かな。何故なら、時刻は家庭科の先生と約束していた七時を少し過ぎていたからだ。チョコ作りで、俺達はこんなに時間を費やしたのだ。

「白亜、後片付けしたら帰ろうな。お前の家族心配するだろ。……特にお前の兄ちゃんが」

「そうだね」

白亜はエプロンを外しながら、そう言った。すると今度はツインテールを僅かに揺らしながら、「蒼くん、ありがとう」と、微笑んだ。

……暖房がきいてて、熱い。

## 白壁式・居眠りチョコレートレッスン（後書き）

空蝉さんや彼方さん、多いつ……！ という事で改名せざるを得ませんでした。もう改名は嫌いです。嫌いですうわーん。泣きたいです。というわけで苓北かなたさんになりました。以後宜しくお願ひします。

おお、アクセス数が、凄い、凄い！

新キャラの朱音のおかげでしょうか。異様に前回の「2人+1人朱音」のアクセス数が高くて恐いです。

ところで、今回はバレンタイン編突入です。バレンタイン編と言いましてもきっと短いのですが。

では、次のお話で。

あとがきでお会いしましょー！ いや、私とあとがきでお会いでいる方は少ないと思います。此処まで読んでくれたあなた！ 次も楽しみにしていてください。

コメントをくれればいつでも返信します。あ、自重してきますね。

## 2月バレンタイン・亜夕、死ぬな！

あつとこつ間に、バレンタインになつた。

調理室の冷蔵庫に勝手に放置させていただいていたチョコレートは冷蔵庫から回収し、今は白亜はくあの鞄の中である。溶けそうだが、溶けない、よな？

チョコレートが自分の出番を待つてはいる一方、白亜はバレンタイン当日といつて緊張しているのか亜夕を何故か避けていた。理由を訊くと、「恥ずかしいんだもの」とのこと。ふむ、恋する乙女つてやつね。

んで、白亜が亜夕を避け続けてもう放課後になつてしまつたらけである。白亜の計画では放課後にチョコを渡すとのことじきつたが、大丈夫だらうか。間に合うのだらうか。

頭の中にはチョコレートを渡せなくて困っている白亜の様子が浮かび、廊下掃除が遅々として進まない。白亜の事もあるけど、水道掃除の黒崎がすぐそばにいるといつていう事もある。

「…………」

「のままじやバレンタインが過ぎる。あ、いや、この話事態過ぎてんだけどや。せめて白亜の奴、亜夕と話すとかじろよな……亜夕も亜夕で困るだろうし。

モップを持つ俺の手は動かず、脳味噌だけいつもよいつも活発に動いていた。今は掃除よりバレンタイン。白亜の事だ。

「……ていうか俺は亜夕あやつと同じ班だが、亜夕が掃除をやつていないと俺に対して怒る様子は無い。いつも俺に掃除を任せていたのに今日は黙々とやつているし。皆どうしちまつたんだよ。

「アオ」

亜夕の事も考えていたら、亜夕が俺に話しかけてきた。

「な、なんだよ」怒るのか？

「そこ邪魔だからどけ。掃除ができないだろ」

「…………」

「どけ」

「あの、亜夕や、」「何」「えっと、あの、なんで今日は皆おかしく」「知るか」

ドオオーン。心中で寺によくあるような鐘が鳴った気がした。なんか、冷たくないか？ いつも冷たいけど変に冷たい。白亜のバレンタインのチョコレートに気づいてんのか？ そんな事ないと思ふけどな。

亜夕は俺の足を巻き添えにしながら「みをチリトリに入れて、何処かへ行つた。」「ミを捨てに行つたのだらう。」

だんだん小さくなつていく亜夕をずっと見ていると、後ろからポンと肩に手を誰かにのつけられた。

「今度は何だよ……」

苛々（いらいら）しながら後ろを振り向くと、水道掃除をしていた黒崎がそこに居た。黒崎は「「ごめんね、いきなり」と俺に言つてきたので俺は「俺こそごめんな……！」と言つておいた。相手が黒崎だから。

黒崎は苦笑しながら亜夕の方を見て、また俺に向き合つた。

「何か一人共おかしいね」

二人共というのは白亜と亜夕の事だろう。黒崎も一人のどことない異変に気付いていたらしい。

そこで、白亜のバレンタイン件は説明した。が、亜夕の事は全くわからないので「俺もわからない」とでも言つておいた。すると黒崎朱音はあははの苦笑してから、

「そうだね、白亜、亜夕くんの前通り過ぎると顔赤くしてたしつむ、これは何があるなつ！ つて私も思つてたんだけど、……は

はあ、チョコレー<sup>た</sup>トを渡すのを躊躇<sup>ちうちょ</sup>っているんだあ。白亜の事は解<sup>あら</sup>つたけど、亜太くんの事は解らないね。でもきっと、白亜が自分の事嫌いになつたのかもと思つてげんなりしてたり……とかはないかな?」

「うむ、一理あるぜ」

「やつぱり、そうだよねー」

黒崎は自分の細い腰に手を当ててまた苦笑しながら溜息をつくと、俺に向かって手招きした。こっちへ近寄れって事か? あ、いや、でも、近寄<sup>そ</sup>つたら近寄<sup>そ</sup>つたらで、

「ところで蒼くんつ。ちいづよねちいづよね……」何故か小声の黒崎だ。

「な、なんだ?」

黒崎はニ<sup>ツ</sup>と微笑んで、しゃがみ、近くに置いておいた自分の鞄に手を入れて何かを探<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>り、すぐにそれを制服のポケットの中に入れ<sup>た</sup>。

「蒼くん、うちの学校はさあ、こいつの先生に見つか<sup>つ</sup>いたらやばいんだぜえ。だから、ちょいと怪しげ<sup>か</sup>コレを受け取<sup>う</sup>つてくれだぜえ」

「え? お、うわっ」

強引にブレザーを掴まれ、すぐにそれは内ポケットに納められた。うぐあ、男子のブレザーの中に手は入れちゃ駄目だぜ黒崎つ。

俺がワタワタしていると黒崎は「家で食べてね。不味かつたら捨てていいくから。白亜とも仲良くしてくれたし、お礼だよ」と言つてその場を去つた。掃除終わつたんだな。

……ところで、「家で食べな」とか「不味かつたら」とかつて、ひょつとしたら、

「……チョコか?」

「ソコソと内ポケットの中身を見ると、それは可愛いラッピングのクッキーだつた。チョコではないが、『バレンタイン』に男子が貰うべきの物だつた。

神様ありがとう黒崎ありがとう！

儀に毎日丁寧に生を送る！

予想外なことが起きる。

毎日丁寧に生きます！ という事で、亞夕が取り残したゴミを俺  
は丁寧にチリトリで集め、そのゴミを捨てる事にした。

ま一回の総合ゴミ捨て場まで捨てにいく。階段を結構降り、裏の外に出る校庭のすぐそばに在るので、何しろ一年の廊下から此処まで遠くてしんどい。……はつ、いけねえ！　丁寧に生きないと……。ガシヤガシヤと緑色のチリトリの音を鳴らせながら階段を降りる。寒つ。寒すきつ。この寒さは俺の敵だが、今となつてはそんなんどうでもいい。天は僕を見ててくれるんです！

階段をかけおり、ゴミ捨て場へと続くドアを開ける。すると一気にふわあっと風が来て「おおおおお」と駆けてしまったが、「ゴミ捨て優先。

「あれ」

いつもあまり人が居ないのに、今日はゴミ捨て場の所に誰か居る。この人も捨てに来たのかな。いや、なんかチリトリを持つたまま佇んでいるし……。ていうかやけにチツコい奴だな、おい。

と思つていたら。

「……亜夕」

亜夕だった。

俺がそう呟いた事には気付いていないらしく、ずっと前を向いていた。俺が少し角度を変えて、ちらりと亜夕の様子を伺つてみると、

泣いていた。

「……」

泣いている亜夕なんて見るのが初めてだつたから俺は同様していんだろう。亜夕の涙は見てしまつたわけでなんとか怖じ気付き、俺もそこで佇んで亜夕を見ていた。亜夕はたまにブレザーの袖で目拭いたりしていて、俺の方を向く様子は全くと言つていい程ない。

「亜夕」

さつきよりも少し大きな声でそう言つてみた。

すると亜夕はまた勢いよくゴシゴシと拭いて、さつきとは違う方向だが俺の方向ではない斜めを向いた。そんな亜夕の近くに寄り俺は、

「おい、袖で拭くなよ。汚ねえし痛てえだろ。ハンカチ貸すから、  
「触るなっ！」

いつもよりも尖つた、俺に對して拒絶を意味しているような大きな声。そんな亜夕の声を、俺は初めて聞いた。亜夕は俺の差し出した手をパンつとはねのける。

「お前だつて後からオレの事……僕の事嫌いになるんだ！ だつた

ら話しかけんな！」

「何の事だよ」

「黙れ！」

亜夕はそう叫ぶと、いきなりガクッと体を地面に落とした。

「亜夕！」

亜夕は倒れたままガチガチと震えて、「駄目だ駄目だ僕の事嫌い

一  
あ  
あ  
む  
「

「どこがつ、どこが痛いんだ亜夕」俺の呼びかけが聞こえていないのか亜夕は謔言のように何かを呟き続けていた。

あ、あ、あ、あ、あ、えりと、

俺はパニック状態になる。人がこのようになるのを初めてみたし、どのような事をまずしたらいいのかわからない。だが、とりあえず俺は亞夕をお姫様だつこのような形で抱え、そのまま保険室へ運ぶ事にした。

…… そんな時に、白亜は何処行つてんだ。

俺は亞夕を抱えながら、まだ掃除中の先輩達がたくさん居るひんやりとした廊下を全力疾走した。

土産をねむが畠にいた。

保険室は遠い。うちの高校は無駄にデカい。走っている間に亞夕の顔を見ると、亞夕の目は何も写していないかのように濁っていて、ボーッとしていた。手はダランと垂れ下がっている。死んでない、よな？ 息してる？。

「亞夕」

お前は……

「お前、どうしてやめたんだー？」

.....おひこさんだよ。

保健室に大慌てで着くと、保健室の先生は亞夕と俺に「ああ」と平然と声を漏らした。

何故か亞夕を見て納得した様子だった。先生は溜息をつく。「またなのね。蒼くんだつたかしら。亞夕くんをやこのベッドに寝かせてあげてくれる?」いつもの事のように先生は言つた。

「ああ、あ、はい」

羽のように軽い亞夕の体を、妙にもふもふしているベッドに寝かせてちゃんと布団をかけてやつた。ベッドに寝かせると、ボーッとしていた亞夕の目は閉じられる。安心したのだろうか。

すると先生は、

「白亜は?」

「……今は、居ないです」

「はあん、バレンタインだから亞夕と顔を合わせたく無いとみた」「どんぴしゃ。

「蒼くんは部活とか無いの? まあ、見たところやつてなさそうだしいいか。……蒼くんはさあ、亞夕と白亜と、仲良いでしょ?」

「仲、かあ。仲が良いのかな。いつもコキ使われるだけかもしれないけどそれなりに楽しいし、俺達は仲が良いのかも知れない。亞夕と白亜がどう思つてゐるのかは知らないけどきっと仲が良いんだと思う。」

「どうか、保健室に来たのは亞夕の為なのにいつの間にか先生とダベリ大会を始めている。」

「仲は、良いと思います。亞夕達がどう思つてんのかは知りませんが

「ふうん」

ポニー・テールを揺らして、何か紙に書いている様子だつた。カツカツとボールペンの音がする。俺の診療かよ。

「私さあ、亞夕の小中学校で保健の先生やつてたわけ。今も此処に居るけど。そんこりから白亜も居て、……うん、亞夕も変わり無しかあ。ところで蒼くんの話はよく白亜から聞いてたけど、蒼くんは一人の僕的<sup>しづべ</sup>存在といふか、『使命』があるじゃない? だったら、知つとくべきだと思うんだよね、亞夕の今の事も、昔の事も」

すると先生は携帯を普通に取り出し、電話をかけた。

「ああ、大久保先生? 水川居ます? あのちつこいの。ええそうです、白亜です。保健室に至急来るよう言つておいてください。……ありがとうございます、では」

学校の電話使いましょうよ。

「今白亜呼んだけど。それまでお姉さんとお話ね

「……お姉さん?」

「文句あるのかな、蒼くん。我まだ二十路<sup>おとじ</sup>行つてませんから」

「ははあ」

「……亞夕と一緒に居て、今までこいつ事あつた?」

「こいつ事とは?」

「こきなりブツブツ念佛みたいに何か言つたり、倒れたり、ボーッとしながら倒れたり、吐いたり、暴れ出したり。暴れてんのはいつもかもしれないけど」

「俺はそういう亞夕を今日始めて見ましたよ」

すると先生は「ふうん」と咳いて、またカツカツと何か書き始めた。何か書いてる様子を見てなんだろうと思つてゐる俺に気付いたのか、先生は俺を見る。「癖なのよね。何かあると書くの。でも、亞夕について書いたのは久しぶり」そう言つて先生は書き続けながら、「今日亞夕どんな風だつたの」と俺に問いかける。

「えつと、まあ、さつき先生が言つた事ほぼ全部……かな」

「はあん。……亞夕最近来ないし、今年入つても何もなかつたから

安心していたんだけどなあ。当ててみせよう、原因は白亜だ。バレ  
ンタインなのにね。ははあ、参った参った。流石ガキの恋愛だよ。  
笑っちゃうね。二人は昔からそつだ。最も変わったのは亜夕だけだ  
がなあ」

「変わった？」

俺の発言を無視して、先生は、「白亜遅い」と呟く。腕時計を見  
ながら先生は、「亜夕はこういつ子じやなかつたの。長々と昔話に  
入るけど、亜夕って大神家の養子なのよ。旧名は狩野亜夕なんだけ  
ど。狩野のババアとジジイ、……ようするに亜夕の母さんと父さん  
ね。狩野のババアとジジイは亜夕に暴力ふるつてたのよ。中学一年  
くらいまで絶えてた。でもついに亜夕は大神家の養子になったの。  
蒼くん、大神グループくらい知ってるでしょ」

「大神グループって……あの？」

全然気付かなかつた。

「大神グループは大きな会社を世界に何件も持つてゐる。よくわから  
ないがとやかく、すごいグループなのだ。

「大神グループの社長の家に養子として亜夕が、ね。あの『テッカい  
家君も見た事あるでしきうに。白亜の家の目の前なんだからさ。……  
：幸せだつたと思うんだけど、アイツ、……亜夕は前の事を引きず  
つてたわけ。だからたまにああいう症状に侵されちゃうの。私はい  
つもそれを見てた。強くなりたいから一人称を僕からオレに変えて  
みたり、態度も変えてみたり、バカだよね、ガキのくせに。白亜が  
居なかつたら亜夕は多分今以上に崩れてたと思うよ。だから蒼くん、  
アイツを支えてやつてよ」

「…………あ、はい……」

知らなかつた。亜夕の過去も、今の事も。それなのに俺は亜夕の  
事を知つてゐるフリをしていて今まで平然と亜夕を守つてた。馬鹿じ  
やねえの自分。いや、馬鹿だ。

悔しくて感情の半分がどこからこみ上げて來ているような気が  
した。思わず何かを叫びそうになり、ぐつと抑える。

……それにしても、先生は保健の先生だからと語りて垂々に詳しそう。小中高と先生をやつていのちも疑問だ。もうほほ主治医じやねえか。

「あの、先生は、失礼します。」

失礼します

タイミング良く白畠がドアから登場してきた。白畠はおずおずとした様子で保健室に踏み出す。「遅いよ白畠ー」先生が白畠に声をかけると白畠は更におずおずとして、「ごめんなさい……」と呟いた。そして顔をゆっくり上げた。何故か悟つているような顔をしています。

「あの、アユが、また？」  
「そう。なんかあつたらー

セセガルガルガルガルガルガル

先生は多分畠山がこのようになつた理由を知つてゐると想つてゐてしらばつくれた。何故かは解らないけど、何となく畠山に向かを感じてほしい様子だった。

白壁は涙目になる。そして遂に大きな瞳に透明の涙を大粒流して声をあげて泣いた。その光景を俺と先生は見ている事しかしなかつた。

寄り、またそこで泣き始めた。

「ごめんなさい」「ごめんなさい！」白亜がバレンタインだからって恥ずかしがってなければアコは自分が嫌われてるって思う事は無かつたのに。白亜ってば、アコの事知つておきながらああいう態度取つちゃつて！　白亜の馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿

馬鹿！

[REDACTED]

ずっと俺は泣いていた。白亜を見ていた。傍観する事しかできなかつたからだ。慰めようとも思わなかつたし、「別に白亜の所為じやないよ」とすら声をかけてやろうとも思つた。俺はこの事について割り込む権利は無いと思う。俺は亜夕の事を知らないし、知つてい

たとしても俺が入るような問題ではない。知つていなかつたら尚権利は無い。……亜夕の事を知らないくせに知つてゐるような事を言つたりしていた俺には権利が無いから。

「なんか、『ごめんね、蒼くん』

「謝るなよ。お前は悪くないだろ」

「…………」

あの後、長々と保健室に佇んでいた為、遅くなつてしまつた。遅くなると白亜の両親も兄さんも心配するだらうからとこゝう事で俺が家に送つて行くといふ事になつたのだ。

外はやつぱり暗い。もしも今が夏の夜だつたらまだ少しは明るいと思つが今は冬。真つ暗でほほ何も見えない状況だ。そのために俺はしつかりと白亜の横につき、見失わないようにする。

「……チョコ、いつ渡せばいいかな」

白亜がふいに、そつと呟いた。軽く彼女の口から白い息が出たのがわかる。

「いつでもいいんじゃないかな。バレンタインじゃなくても白亜の気持ちは変わらないだろ。最もチョコが腐んなきゃいいけどな」

「あは、は。そ、だね……」

何故か白亜は悲しそうだつた。暗くて表情はよく見えないがとにかく、その台詞から悲しそうな顔をしていると悟れる。無理に笑つている。

俺は少ししゃがむような形で白亜を俺の方向に向きなおすせる。

「何？ 蒼くん」「…………無理に笑うなよな」

きょとんとした様子の白亜はしゃがんでいる俺を見下ろした。電灯が丁度俺達を照らし、お互いの表情をわかりやすくした。……せ

つぱり、白亜は苦い表情をしている。

「とにかく、無理に笑おうとすんなよ。あと、苦しいような表情もすんな。亜夕も悲しむし俺もそんなお前みてると辛いから」「でも、

「なんでもっ」

本人はどうも納得がいかないらしく、

「むー……」

「困った顔しても答えはでないぞ」

「じゃあ蒼くんは白亜にどんな表情をしてほしいの？」

「…………」俺はその質問には返答せず、立ち上がって白亜の手を握った。「…………はぐれるなよ、暗いからな」「蒼くん？」

「…………白亜には、」ずっと「白亜らしさ」表情をしていてほしいんだよ」そう、亜夕も俺も思つてゐる。

「…………わかった」

白亜は童顔を「クン」と下に動かし、頷いてから俺の手を強く握つた。ちよつと汗ばんでいる。保健室の暖房少し暑かつたよな。正直ああすぎだつたし。

白亜を家まで送つてから、俺も自宅へ向かう。

白亜の家からウチまではそう遠くない。此処からだつたら後は真っ直ぐの一本道を渡るだけだしその一本道は別に坂でもないから、辛くない。

ところで。

今俺は亜夕がどうなつてゐるのか解らない。亜夕は先生によつて自宅に送られているのかも解らないし、ひょっとしたら先生が病院に送つたかもしれない。それかまだ保健室に居るか。どちらにしろ亜夕には早く復活してほしかつた。今はなんとか亜夕の鞄アタックを久々にくらつてみたい気分だし、亜夕にこき使われてみたくなつ

てる。Mかよ自分。

亜夕の事を考えながらふいに内ポケットのチョコレート（マイハニー黒崎から）を取り出し、食べてみた。文句は無いけどやはり普通のチョコレートだつた。美味いよ、普通に。

チョコレートを食べながらにまりとしていると、ラッピングの袋の中に何か紙が入っているのがわかつた。

「なんだ、コレ」

ガサツと開けて、そそくさと電灯の下に立つてその紙の内面を見ると、丁寧で綺麗な字で何か書かれていた。……ギャル文字じやなくて内心めっちゃ嬉しい。

『蒼くんへつ！

いつの間にかバスケ大会が延長されているけれど、私はやる気満々だよ！ 三月に入つても練習頑張ろうね！ ところで、チョコレートの味はどうでしようか？ 毒味して一応問題は無かつたんだけど蒼くんの口に合つつかどうか……。そういえば、四月、同じクラスだといいね。私達三学期くらいから詳しく知り合つたばかりだから四月からは白亜と亜夕くん達と勉強会やつたりもできたらいいね。ではではあ。また学校でね。よろしければチョコレートの感想をお聞かせくださいなつ』「ぬおお」

ラブレターではなかつたが、十分嬉しい手紙だつた。永久保存版だぜ。

バレンタインも普通に終わつた。

白亜は多分バレンタインが終わつても亜夕にチョコレートをあげたい気持ちで山々だつただろうが、チョコレートをあげる相手・亜夕がもうすぐ終業式だつてのに学校を休んでいるわけだからチョコレートをあげるとかそれ以前の問題は亜夕になる。

終業式はもうすぐ……といふか終業式前日だよ、もう。

三年生を社会に送り出す前の儀式、卒業式の練習に俺達は参加させられるわけだからダルい。

三年生なんて一人一人覚えてないし送る言葉なんて思いつかない。帰宅部で先輩達と交流が無いからな。まあいいんだけど。

白亜はチョコレートを渡したがつてゐる。

なのに、亜夕は全然来ない。この間の件で休んでいるのだろうか。

亜夕学校来ねー……、なんて思つてゐ内にもう今は終業式の日だ。いつも白亜と亜夕は一緒に学校に来るくせに亜夕は家でお休みだ。そのために俺は白亜と一緒に学校行こうと言われ、今白亜の家の前で待つてこることうところにまで至る。

白亜はズバリ、用意が遅い。この間なんかはやつと出でてきたと思ったらフリフリのパジャマ姿で登場して、「じめんなさいー。まだなの！ すぐ終わるから待つてー」ときた。朝早く起きようね。

そして此処で待つてると、通学途中の学生達の冷たい視線もくらう。とくにカバンに白亜ファンクラブのプラカードをつけたりした奴に睨まれる。そいつらは白亜の家を知ってるからな、まだストーカーまでには至らないけど。

「どうして白亜たんの家の前にお前が居る」なんて顔。うげ、また睨まれた。

「じめんなさい、えり蒼くん。おはよー」

後ろを振り返ると白亜が居た。よかつた、パジャマじゃない。ちやんといものツインテールで、制服を着ている。小さい背もいつも通り。童顔も。

「おはよう。ちゃんと眠れたのか？」

「あはは……うん、って言つたら嘘になるよー。ちょっと本読んだの」

「寝る」

小さな体の隣に立ち軽く咳き、歩き始めた。白亜は俺を見上げながら何かを話している。

「前にねー、アコに借りた本だつたんだけど読むの忘れてて昨日読んだの。なんかねー、ふあんたじい系だつた。妖精とかが出てくるの」

「白亜が好きそうだな」

「あー、……でもなんかその妖精は実は悪い子で、主人公を食べちやつてエンド。最後らへんはやつぱりアコの読みそつな本つてかんじだつた」

「食べたのか」

白亜は屈託のない笑みで、「うん！」と返してきた。妖精が主人公を食べちゃう怖い話なんか読んじゃいけません。

白亜に変な本を読むなと軽く注意すると、急に高い声が後ろから

聞こえてきた。

「ふむふむ……ふあんたじい系かあ。私も読んでもようかな」

「あー、朱音ちりやんおはよー」

「おはよー、白畠。と、蒼くん」

「ぬあああああ、お、おはよー」

高い声の持ち主は黒崎朱音。くろさき あかね 肩に届くくらいのショートヘアは小さな顔を軽く包みこんでいて、朝の太陽の光を反射できそうな笑顔を持つ俺の天使（エンジェル！）である。俺の初恋の相手。俺が密かに思いを寄せる相手なのだ。

「蒼くんワックス使うのかあ。ふむ、最近の男の子はオシャレですな」

「え、なんでワックス使つてるつて……」

「臭いでわかったのー。だいじょぶだいじょぶ、先生に言つ程私はイヤな子じゃないのよー」

ワックスは黒崎を好きになる前から使つてて、その、別に好きな女の子ができたからつて使つてるわけじゃ、ない、から。

「白畠もねえ、寝癖を直す為にしゅっしゅつてつけるスプレーつけただんだよ。なんか、パッションフルーツの香り」

「わあ、ほんとだー」

残念ながら俺はパッションフルーツの臭いをかけない。白畠のツインテールに手を出して「わあ良い香りー」なんて言つたら変態だから。「良い香りだぜ……！」なんて良いながら白い歯を出して親指をたてるのも無理。だが、春の風にのつてわずかに甘い臭いが…したかも。

なんてロマンチックな光景は無いよ。

「それよか、黒崎はその、部活の朝練とかは……」

「ああ、今はね、無いのー。本当は私も朝練があつたら行きたいけど終業式じゃない？」

「ああ、トークのセレクトをミスしちまつたぜ。終業式なんだから無くて当たり前だろ自分。

「白亜も蒼くんも部活やつてないんだつたらバスケ部来ない？ 一年生からでも私が優しく指導するよ～」

……一年生といえば。

俺達、もうすぐで一年生なんだつけ。  
今気付いた。一年生で、亜夕と白亜と騒さわめくつた結果一年生になるのだった。

なんだかんだけで楽しかった氣もすれば短かった氣もある。……そんな俺の思考を悟つたように白亜は俺を見上げた。「もうすぐとうか、終業式が終わつて春休みが終わつたら一年生なんだね」しみじみ。「クラスが一緒だといいねー」

「蒼くんと私と、白亜と……亜夕くんも居れば、なあ

「……」

「……」

「……」

三點リーダーが沢山追加されていく。

途端に風がふいて、今の雰囲気をより寂しくさせた。

この寂しさを水圧が潰すように、俺の心も潰す。そつだ、亜夕が居ない。きっとまだ家で安静にしている筈はずだ。未だ亜夕自身の精神は安定していないから学校に来れないのだろう。アイツ、一年生になつても来ないつもりかよ。

俺がボーッと亜夕の事を考へていると、黒崎が俺と白亜を交互に見つめるのを繰り返しながら、

「「じつ、「ごめんね」ごめんね！ なんか私のせいで、折角楽しかった空気が、……その、台無になつちゃつて！」

必死に謝り続ける黒崎に白亜は「朱音けやん、謝らないで」と言つた。

校長の長い理解不能の話を聞き流した後、やけに軍歌っぽい校歌を歌い、春休みの生活上の注意と過ごし方も聞き流し、体育館から教室までバラバラで並んで帰ってきた。

その後、通知表をもらつたが結果においてはスルー。後で父さんに怒られるかもね。怒られたら怒られたで「子供のお守りでせじくで……」と空気を濁すつもりだ。いけない、更に怒られる。

先生からは特に話は無いといつ事なので、余りの時間は最後のクラスで仲良くといつ事でダベリタイムになつた。予想通り白亜が「うりやーっ」と飛びかかって甘えてきたために、俺は相手をしてやる事になつた。黒崎……黒崎は残念ながら女子とお話を中。

白亜は胡座あぐらをかいしている俺の足にちょこんと座つて、ニコッと微笑んだ。

そんな白亜に俺は話しかけてやる事にする。

「俺と話すのもいいけどさあ、白亜、女子達と話したりしないのか？」ムサい俺と違つてじゅうぶん楽しいだろつ

「蒼くんとお話のほうが楽しいの一」

わーお、俺モテモテ。

「お話といつても俺トーケセンスないしなあ」

「いーのーー」怒られた。そこで白亜は急に真面目な顔になり、俺の足から軽く降りる。「……一年間楽しかつたね。蒼くんが私達の恋に協力してくれたし、アユと居るのも元々楽しかつたけど、蒼くんが新しくお友達になつてからもっと楽しくなつたよ」「そうか？ よかつた」「うん。白亜の第一のお兄ちゃん!」「ほほお」「だからね、一年生になつてクラスが離れ離れになつても仲良くしようね、お兄ちゃん!」「…………」

「じめん、俺口ココンとかじやないけど、……さすがに今のは鼻血出しあうだぜいつひえつふえつふえーい。妹最高!」

白亜は「お兄ちゃん」と呼ばれ浮かれていた俺は、黒崎に「話があるから体育館裏に来て」と言われた。なんだ、俺女子からの呼び出しが多い。

でも今回の呼び出しの相手は黒崎だ。なんだ、体育館裏というシチュエーションは！ 男を興奮させる氣がこの野郎！ 大体体育館裏というのは岩田スポーツ！ うああ何言われるんだろ。

少し期待しつつ、ざきまきしつつ俺は体育館裏に足を踏み出した。……まだ誰もいない。冷たい風が俺の体を彼のようにしてふきかかる。

「おお、寒い。とか思つてた内に声が聞こえたのはその刹那だった。

「あ、の、岩田先輩！」

……ん。

遠くから何やら声が聞こえる。岩田って確かサッカー部の三年の先輩だよな。ちなみに声は黒崎でもなければ聞きなれた白亜の高い愛らしい声でもなく……別の生徒だった。

ん、もしや。

「いつもいつも、岩田先輩がサッカーで頑張つてるとこを見ていた、その、わたわた私、かつこいいなあつて思つてました！」

うわうわうわおいおいおい。

生徒は俺の存在に気付かず続けていく。

「先輩の事が、こ、こここここ、ことが、」

「おい！ かむな！ その調子だぞ、自分の気持ちを素直に、

「わつ」

腕を急に誰かに引っ張られ、俺はその腕を引っ張る奴の思つがままに移動される。グイグイと引っ張られ、あの、その、柔らかい物が。……腕を引っ張られてついた先は体育館裏に在る小さな暗い体育倉庫だった。こまみに校庭でよく使うライン引きの倉庫とも言つ

ていい。

倉庫の中にソイツと一緒に入り（というか入れられた）、ソイツは「しつーー」と俺に忠告した。この声のあの柔らかい感触ともいい、女子だ。

「「めんね蒼くん、此処、告白スポットだったみたい」

小ちな声でそう呟いたのは黒崎だった。

「ぐ、くわつ、さつ、きつ？」

「しーつ。告白の邪魔しちゃダメだぜボーラー

「す、すまない」

といつ事はあの柔らかい感触は黒崎の……と考えると急に心臓の動きが早くなるのがわかつた。落ち着け自分。

暗くてよく見えない。だが黒崎の声はちゃんとわかる。彼女の首もだけは光に照らされていて、白い首もどが強調されていくようだった。

黒崎は扉を開けて出ようとしない。だが外の様子を確認する為に耳を扉にてる。微かに聞こえてくるのはさつきからかみまくつている台詞だった。この調子だと吉田先輩の事が好きなあの生徒は、「すきやき」とでも言つてしまつかもしれない。

静かすぎて、お互いの息が聞こえてくる。黒崎と俺の距離が近いためにたまにお互いの体があたる。

「……外に出られそうにないね。まだ告白してる」

「あ、そ、そうだな」とつてつけたような返事をした。

「なあ、いつまでも待つてたら話を聞けなくなるんじやないか？」

此処には誰も来ないと思つし、どうせなら話今聞くよ

そういうと黒崎は「……うん」と声をもらした。その声が黒崎らしくなかつたのを忘れない。

「……あのね、白亜、元氣ないの。亜夕くんがあんな風になつた件についてま<sup>す</sup>私既に知つてるんだけど……。いつもの白亜じゃないの。今は無理してると思うんだけど、ボーラーとしてるかんじ。元氣づけ

てみてもただ『ありがとう』って言つだけで。小さな手と手をね、重ねて握るようなかんじで『ごめんなさい』ってずつと謝つてるの。……は、はくあ、悪くないのに、わ、たし、ちつとも悪くないよつて言えなくて……最低だよね、わた、し

表情は暗くてよく見えなかつたが、きつと黒崎は泣いている。

黒崎を慰めた方がいいのかな、と迷つていれ内に、黒崎の頭がぽすんと俺の胸にのつかった。

「……黒崎？」

黒崎は無言で俺の体に手を回してくる。柔らかくて細い腕が、俺の胴体に回つた。

「……あの、これ、夢ツスか？」

神に問いかけたかった。がこれは喜んで良いのか悪いのか、リアルである。

「蒼くんは、白亜の事すぐ元気付けられるでしょう？」羨ましいな

「俺は、……ちつともだよ」

「そりかなか……？」

「そりだよ。俺なんか全然」

「蒼くんはすごいよ。否定しなくていい。だけど私が全然なの。私、これで本当に白亜の友達だつて言い張れるのかな？」言い張つて、いいのかな

黒崎は上目遣いで俺を見上げる。そんな最中<sup>さなか</sup>空氣を読まない俺の心中はまさにフイーバー状態だつたが、俺はこの場の空氣を崩さないようにとりあえず微笑む。「言い張つて良いんだよ。お前が友達だつて思つていれば友達だろ」

「……ありがとう。でも私、弱いんだよ」

悲しそうに黒崎は微笑んだ。

そんな彼女の姿を見てしまった俺は、彼女を抱きしめずには居られなかつた。元々抱きしめられていた俺だったので、俺はただ、黒崎に手を回して強くギュッとすればいいだけだ。有言実行というわけで、手を回す。

……細い。死んでる？ と思つ程に細い腰だつた。白皿よりはしつかりしてゐるが。

「あの、ね。私また泣いちゃうかもしれないの？」

「……ん？」あ、ああ

「だから、だから」

刹那。

急に太陽はもつと光りだし、暗かつた倉庫を少しだけ照らした。お互いの表情、姿がよく見えた。

「だから、蒼くんに、」

黒崎朱音は躊躇しつつ言葉を紡いだ。

「ずっと傍に居てほしいの。今までも楽しくて笑っちゃうくらい傍に居たけど、一人で、もつともつと笑えないかなって。私、蒼くんの事、す、……な、なんていうか、他の男の子とは違う感情持つてる。ただ少しの間そばに居て仲良くしてただけなのに……私、弱い」  
その先の言葉を紡ぐ。

「好き。だから、私が泣いた時はまた今みたいに抱きしめて」

「…………」無言だつたが、俺はすぐに頷いてまた彼女を抱きしめた。「蒼くん、相談にのつてくれてありがとう。……あと、私の気持ちもきいてくれて、ありがと、ね。あの、あまり気にしないでっ！」私、ただ蒼くんに好きって言つただけだしつ！ 別に彼女にしてくださいだなんて、…………」

黒崎はまた静かになつた。そして俺を見上げておねだりするようなかたちで、「彼女にしてください」と、紡いだ。

俺は言葉が出なかつたのでとりあえず、少し体を低くして、……

……

その先はわかるだろ？から、以下、略。

## 朱音と俺のファースト××（後書き）

うわああああああああああああ！

羞恥！ 羞恥！ 羞恥！ 羞恥！ 羞恥！

ラブシーン（しかもしつかりしたの）は初めてです。改めまして  
苓北です。

ん？ 題名のファーストの次は何だつて？ それは御想像にお任せします、恥ずかしいので。

早いですが朱音と蒼が「ゴールイン？」しました。やつたね！ 本作で2カップル目です！ どんだけ趣味満載の物書いてるんですか  
私！

すみません……色々と。

それでは、早いですが次回でお会いできたらいいなと思つてあります。

次回では春休み編に入れたら入り、入れなかつたら一年生編に入ります。一年生編では更にキャラクター追加予定です。読んでくださつている方、お楽しみに。

## 春がきたぜ！ 始業式

「……黒崎が俺と付き合つ事になつた。即ち、黒崎は彼女になつた。あの時、俺達はあんなことをしてしまつた。嬉しいけど、複雑だ。以上！」

その日、俺は俺にそう言い聞かせて春休み直前の日を終わらせた。

春休みの謙虚な過ごし方その1・交通安全に気をつけましょう。クリアー。

春休みの謙虚な過ごし方その2・一学年の復習をしつつ、一学年での予習もし、しっかりと勉学に励みましょう。クリアーしていい。バツ。

春休みの謙虚な過ごし方その3・友達と外出したり、遊ぶ時は、春休みの謙虚な過ごし方その1を心がけよう。また、金銭トラブルには気をつけよう。出かける際には大金を持たないように心がけよう。……この間ゲーム買う為に軽く三万持つていったんだけどなあ。春休みの謙虚な過ごし方その4・生活面を気にしよう。もう、アウト。

高校にもなつてこんなもの熟読せなかんのかい、とツツコミを入れたくなる程の春休みのしおりを通学用バッグに突っ込んだ。それも無理矢理。

そしてネクタイをしっかりと締めて、ブレザーを羽織る。

今からまあ始業式に向かうわけだ。春休みの件は一切無かつた理由としては別にネタが無いわけではなく亞夕が居なく、俺に命令する人が出なくなつた為であり執筆には何の問題も無い。ただ冬休みのようないつもグータラに過ごしていた春休みは一気に終末を迎えたし、

特に何も無かつた。

寧ろ始業式に行くのだと考えるととても嬉しい。

俺は、黒崎の事で頭がいっぱいだった。今正にその状態なために、俺は自分で頭をガスガスなぐる。だが心の中では、

「春到来だねつ」

「こんなかんじ。

語尾に「」をつけでもよかつた。黙れ自分。

「黙認黙認黙認！」

何が黙認なのかわからないがとりあえずそつ茲ひてから階段をおりて、リビングに出た。

母さんも父さんも居ない。折角の春休みだから休むと詰つと思いつや仕事すると言つて夜中まで仕事をしている。今日は朝までかよ。つきっぱなしにしていたテレビの画面をコンマ5秒眺めてから、ローファーを履いた。正直ローファーは嫌いだけど紐靴も面倒だから。

ドアノブに手をかけ、「行つてきます」と呴いて、春のにおいがする外にでた。

桜！ 桜！ 桜！

いやふー、桜だぜ、春満開のよ・か・ん？

そんな事は特に無い。

だが、俺の家の前の公園に咲いている桜は満開だった。勿論あんな思考はこなかつたけど。

「一年生かあー……」

ぼやいて、ガクツと肩を落とす。めんどくせえ。1年の面倒も。まあ俺はしないと思うけど、何より勉強が面倒くさい事この上ない。ただでさえ切羽詰まつてんのに勉強なんてやつてられるか。

頭をわしゃわしゃをかきむしって、門を出ると、小さな姿が見えた。

あの口つの水川白里みずかわ はくさ、ではなく、

「あああああつ！？」

黒崎朱音くろさきあかねだつた。

黒崎は肩まで届くくらいの黒く艶やかな髪を春風に靡かせながら、届託の無い微笑みで俺の方に振り返つた。まあ、苦笑いと言つてもよかつたけど。

俺と並ぶと俺の肩にやつと届くくらいの身長でローファーの音を彼女はならした。あ、歩いてくる。」ひたひた。

「あ、えつと」

俺が顔を赤面させていると、黒崎が先に、

「おはよー、蒼くん」

「ああ、……おはよー」

「さ、いこつ」

「あー、おう」

どうして黒崎が俺の家の門の前に居るのかよくわからなかつたが、黒崎とあまりギクシャクしていない関係なので今はどうでもいい。黒崎が先に歩み出されたので、俺は黒崎の隣に無言で並ぶ。

かつ、かつ、かつ、かつ。

かつぽかつぽかつぽかつぽ。

……。

「……あのぞ、黒崎」

「えつ、何？」

「ローファー、新しく変えたか？」

「なんでわかつたの！？……もしやお主、エスパーだな！」

「違う違う！なんか音が俺と違うんだ。かつぽかつぽつて。だから、新しいのを買ったんだけどサイズがでかくてそんな音がすんの

かな、つて

「む、細かいよう

「すまない」

「そんな真剣に謝らなくとも」

黒崎は「くくく」微笑んで？ から、また俺を見上げた。

黒崎の瞳が朝の太陽の光でキラリと光つて、一瞬俺を眩しくさせる。

「私が蒼くんの家の前に立つてしたこと、何も言わないの？」

直視できない程可愛らしい顔で俺を見る黒崎は、正に天使と言つてもよかつた。

「別に何も言わないよ。……黒崎だから」

「…………」

「何、この反応！」

「こちら特殊部隊！ 羞恥心というものがやつてまいりました！ あああ、流行のあのミュージックと共に奴（羞恥心）が襲つてきます！ 繰り返す、こちら特殊部隊！ 羞恥心というものがやつてきて……うぐあああああっ！」

自分の言つた事に後悔し、羞恥心を感じ、黒崎に助けをこう田で見るがもう襲い。黒崎は睡然とした様子で俺を見て、「黒崎だから黒崎だから黒崎だから」と讐言のようになつて咳いていた。危険。

「うめん、変な事言つて！」

「黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから以下略」

「ぎやああああっ！ ……まあ、自分で以下略つて言つてるから正常だよな。黒崎、それはジョークだよな？」

「畜生、バレたかー！」

黒崎は舌をペロッと出して、前を向いてタタターと歩み始めた。その後を俺は微笑ましげにゆつくりとついていく。俺に前を向くようにして、後ろ歩きになつた黒崎は何やら話し始めた。

「本当は白亜が来る筈だったんだけど、私が来たの。白亜がアコと一緒に来るんだって。嬉しそうだつたよ？」

「亜夕、もう学校に来れるのかー？」

「そうみたいだよ。よかつたね」

俺は黒崎の一言をきき、安堵の溜息をついた。よかつた。もう亜夕の奴学校に来れるのか。白亜もすげえ嬉しいだろうな。

「でもでも、一年生と言つたらクラス変え!」

「そう、なのか?」

「まあ聞いてよ。一年生になつたらクラス変えじゃない? あのち  
びっ子カツブルが同じクラスになれるか……。私達も同じクラスに  
なれるかな?」

「なれなかつたらなれなかつたで、ドンマイとこいつ」とで  
俺は面白半分にそう言つて笑つた。そんな俺を見て黒崎は、「ひ  
どーい」と言つて白い頬を膨らませる。

「嘘だよ、嘘。同じクラスになれるといいな。亞タと白畠とも  
「うんっ!」

黒崎は前を向きなおした。それと同時に景色は桜の坂道になり、  
黒崎の後ろ姿を桜がより一層美しく包みこむ。その光景に俺は一瞬  
ドキッとしたが、すぐに顔を笑顔に戻し、黒崎についていく。

黒崎の少しだけ力いローファーの音と、俺のローファーの音と、風  
に桜の木がざわめく音。あとは後ろと前に居る登校中の生徒達の会  
話の声。その音がまるで音楽のようになつて、俺の耳を通り抜けて  
いく。

すると、黒崎が足を止めた。

足を止めた黒崎の方に歩みより、「どうした?」と声をかける。

「寂しくなつちゃつから。たまにはまつてね

「……え?」

「言つが早いが、

「すきありいつ!」

「んん!? ん、ん!」

「コンマ5秒後、俺達は離れた。

「さあ、行こーう!」

キスする時の立場が反対じゃねえか。

クラス変えの結果を発表しよう。

2B・俺、黒崎・亜夕、白亜。

……おい。

4人一緒になんてありえねえ。と、出席番号順の席のところに座り、クラス表を見てそう思つた。まさか4人一緒にだと……、奇跡中の奇跡だ。まあクラス変えというのは成績や運動神経などのバランスで割り振られるから、たまたま俺達は都合良く割り振られたわけである。と、思つ。

女子達は（中には黒崎も入る）同じクラスで良かったねーなどと騒ぎ、さやいきやい騒音を作りあげている。そんな女子達を見ていたらさつき黒崎と目が合つた。黒崎の微笑みを受けてノックアウト。今はそのノックアウトからようやく立ち直つた時である。

ふむ、まあ、いいとしよう。

クラス表を見て微笑んでから、中身の少ない鞄を横にかけていたと、ドアが勢いよく開いた。

「な

感嘆符はでなかつたが、一文字言葉が漏れる。

「……亜夕……」

亜夕と白亜だった。

白亜はオドオドしながら2Bの教室に踏み出す。長いツインテールをぴょこぴょこ揺らしながら微笑んで、俺に「おはよう蒼くん」と声をかけてきた。俺も「おはよう」と声をかけてから、また亜夕に視線を戻す。俺は立ち上がり、歩みより、亜夕を見下ろした。

「む。何だその目は」

亜夕を見下ろしながら、

「大丈夫なのか？」

「むう。変態ドスケベに心配される程オレはヤツじゃない

何故か亜夕は童顔をにまーつと緩ませ、背伸びして俺の肩に手をやつた。

「オレの事はどうでもいい。迷惑をかけたな。まあその、なんだ。ちょっと封印を解除してしまったような物だ」

「封印解除つてなんだよ！……お前、本当はまだ不安定なんだろ？なのにそんなこと言つて、」「気にするな。それよりもオレと同じクラスになれた事を誇りに思え」

また亜夕はにまーつと微笑んだ。何故か機嫌がいい。

「そこ退け。席につかせろ」

「お、おう」

俺が一步ひくと、亜夕は通りすがりにスラッシュ、

「お前にも春が来たそうだな。いやあ、よかつたよかつた」と、呟いたのだ。

.....。

その場で硬直する。亜夕はそんな俺を気にせず出席番号順のニアの手前の席につき、「椅子が……」と呟いている。身椅子が一年生ようになつたため、身長に合わないのだらう。

俺は用意をする亜夕の前に立ち、亜夕を見下ろした。

「なんで、知つてんだ？」

「にゅふふ。ワケあり」

「そのワケありのワケを教えてくれないか」

「……だああああ！朝っぱらからうるさこな、蒼！折角機嫌良かつたのに……。ちょっと朝の濃厚なキスを見ただけで、「濃厚！？」「ああ、ビックリしたぞ。さすがにオレと白亜もあんなのはしたことない」「ガキが濃厚とか言つたこのショタぐわああああああああああ！」「そうつなだれるな、別に公開しないぞ」すると後ろから白亜がやつてきた。

白亜は頬を赤く染めて、

「ははは、白亜も、ビックリしたよ！あんなのーーーなの……

ぱつ

「ほつ。じゃない！ ほつ。じゃないよ！」

「まさか一人がそんな進展していたなんて白亜予想外だつたよう」

「なんだ白亜、知つてたのか」

「あ、アユはお休みしてたから知らなかつたよね！ 終業式ものーこーだつたよう」

「どういう事だ、アオ」

亜夕は目を輝かせて俺に問いかけてくるが、そこはノーコメントで。マスコミに追いかけられる芸能人みたいな気分になりつつ、俺は「ノーコメントで……」と呟いた。

すると白亜は歌い出す。

「はーるがきーたーはーるがきーたーどーこーにーきたー」

「「そーうにきーたーそーうにきーたーつーいーにーきたー」」

「歌うな！ しかも2人でハモるな！ なんだよついにきたつてー！」

まあ、いいや。楽しいから。

## 謎の転校生、龍ヶ崎黒姫・白姫

朝の、HRが始まった。

「えーと、皆さん、おはようございます。進級おめでとう。また先生とも一年間よろしくね」

今年も見事に、かぐひやか独身の神楽坂先生だった。今日はなんだか純白のスーツを着ていて、なんともまあ、美人の先生に会っているスーツだった。

先生が今日の流れを説明しているのを無視して、俺は亜夕の方をみる。にやーと笑われた。嘲笑だ。無視した。むすーとされた。……俺的にはこの間の件もあり心配したつもりだったのだが、それを見事にスルーされる。心配してやつてんのに。

白亜は、さつき配られたプリントに熱心に落書きしていた。この頃白亜はお絵かきにハマっているらしい。この間なんかはメールで「お絵かき楽しいねー」なんて言つていたし。

黒崎は……黒崎は、しつかりと先生の話を聞いていた。時折、女子に目配せされ、それに対応するだけであとはしゃんとしていてもの凄く礼儀正しい。二年生になり、黒崎のスカートは少し短くなつていた気がしたが、それは本人がスカートを短くしているのかあるいは背が伸びたのか。どちらかはわからないが女子の子らしくなる気がする。

俺のキモい想像を打ち消すよつに、先生が俺の方を見た。「アオくん」ぱつん。「先生のお話、聞いていましたか?」ぱつぱつ。「聞かないとダメですよー」ぱつぱつぱつ。

プリントの束で俺の頭を軽く叩いた先生は、新たな話を始める。「今日は、二年生ということで、転校生が来ます。というか来ました。少々ベタな展開ですが、許してね。もうドアのところで転校

生が待つていいというところでベタですけどさつまつが転校生さんもやりやすいでしょうし

転校生？ 転校生、かあ。

「はーん」といったかんじで、人差し指で机を二つつひとつと軽くノックしながら転校生さんが来るのを待つ。実に三十回田くらいのノックで先生はその謎の転校生さんに「いいですよー、どうぞー」と声をかけた。

静寂に包まれた空氣の中、ドアが勢いよく開いた。

がらがらがらばきつ！ という具合に。ん、ばき？ びびゅらドアが外れたらしげ、先生がドアを直し、転校生さんは自己紹介をしようとする。おい。

「……龍ヶ崎黒姫。趣味はスポーツ系。姉の龍ヶ崎白姫とは双子だ。色々と迷惑をかけてしまつかもしれないが、仲良くしてもらいたい。以上」

某無自覚神様のように「以上」と付け加えた龍ヶ崎は、俺を鋭い眼差しで見つめてきた。多分、睨んでいるわけではなくそういう目つきなのかもしれない……。

ちなみに。名前で女子の侍系キャラクターを想像した人が大半だと思うが、龍ヶ崎は『男』だった。これには多々なる意味で血が凍る。名前が、『龍ヶ崎黒姫』。顔は女子のようく美しい顔立ちだったが、凛々しさと、よく通るモテそうな声は男だった。声優をやつたら売れると思う。背は残念なことに俺より高い。侍系か。黒い艶やかな肩より少し上くらいの髪はサラサラしてそうで、テニスコートの上でその髪が舞つている様子を想像すると実に好青年。こりやあ女子にモテモテの人気者だ。

「龍ヶ崎くんは、アオくんの後ろね。ちょうど田中くんが転校したし……アオくんの後ろの席だけ開いていたから、そこね」

俺の後ろかよ。ていうか、田中って転校したのか。

田中ってどんな奴だったつけ？ と、想像していると、龍ヶ崎が「わかりました」とその男子のくせに綺麗な顔で先生に応答し、俺

の後ろに座る。その間に女子がキヤー キヤー うさかつたが、気にしないことにした。

龍ヶ崎のこともあまり気にしないことにする。

高嶺の花というと意味が違つてくるが、ああいう爽やか系とは世界が違う。

あれから、朝会にて校長の長つたらしい話を聞き、龍ヶ崎の紹介をしていた。黒姫の方の紹介は見たが、……迂闊うかつだつた、姉の白姫さんとやらは見ていない。だから、描写できない。

で、今は、帰りの用意をして、し終わった人から帰りましょうといふことになつたわけだ。どうやら先生たちは入学式のこと忙しいらしい。頑張れ。

「アオ、帰るぞ」

亜夕はもう帰宅の用意を済ませたらしく、白亜をつれて俺に早く用意をしろとせまる。

「ああ、ちょうど今終わつたし、……んじゃ、帰るか!」

白亜の頭をポンポンと軽く叩いて、三人で下校しようとした。ちなみに黒崎は他の女子と下校。

廊下に足を踏み入れた、その時。

「お前が、龍ヶ崎の前の席の蒼あおという奴か」

えつ、と思つて、後ろを向いた。

龍ヶ崎が居た。どうやらこいつの一人称はおかしなことに自分の苗字らしい。

無視して、また下校しようとした。襟を後ろからひっぱられた。

「な、何やつて、」「龍ヶ崎のところに来い！ でなければ、お前の首はふつとぶぞ！」「いつの時代じゃアホ」「来い」「うぐあー」ずるずると引っ張られる俺を見て、ロリとショタは「先に帰つてる」と言い残して去つていつた。待てよ、助けるよー。

「し、ぬ！ ぐるじー」

俺を無視して龍ヶ崎は男子トイレに連れ込む。凄まじい力だ。男子トイレの水色のドアを龍ヶ崎は片手でがらつと開け、俺を放り込み、自分も入る。そして内側の鍵をかけて誰も入つてこれないようとした。なにやつてんの。

「お前、何のつもりだよ！」

久々に本気でぶちぎれて、その場にへたれこみ、龍ヶ崎を見上げた。まだ喉が苦しかったために、げほげほと嘔<sup>む</sup>せる。

「何つて、……まあ、用があつただけだ」ふつうの顔をして答えた爽やかくんは俺を見下ろす。「用がある以外にどうして此処につれこむのだ」

「あんな力ずくで此処に連れ込まなくてもいいだろ」「力ずくでないと、いけないのだ！」

龍ヶ崎がいきなりキレ始めた。

「ちょ、までまで、何故にキレる」

「……お前と、その、あの、……水川白亜と、大神亞夕は、あの、どういう関係だ？」

「え」

返答に困る。龍ヶ崎ははあはあと怒りのために息をきらしながら、「噂によると、お前はあの二人を虜めているときいた！ そしてお前がとてつもなく強いと聞いた！だからこの龍ヶ崎はお前を成敗するために無理矢理此処につれてきたのだ！……許せない、よくも二人を……」

「ばか、まてよ」

龍ヶ崎は自分の背中に手をのばす。そして、俺の鼻あたりに近付けた物を見て、俺はビクッと肩を震わせる。

正氣が、コイツ。

竹刀を構えて俺のところにじわじわとよってくる龍ヶ崎は、何やら話し始めた。「あの一人は保護せねばいけない対象なのだ。だから龍ヶ崎が保護をする。」のような、汚い男に虐められていたとは「汚いってなんだ？」

「お前のその寝癖かわざとかわからなし髪型！ 淫し！ 実に淫ら  
わしい！ しかも、あの一人を虐めて……何故虐める！ 何故フラ  
グをたてずに……！」

「いやあの、慮めてませんし、あの、誤解ですし……フラグ?」  
「そんなハーレムの中、お前という奴は……あ、ちなみにフラグと

「はあ……」

意味の分からぬ言葉が飛んでくる。

はー！ しまーた！ またこのよーいだ単語を使いつけて会話してしまった。なんたる不覚！ くそおおおおおおおー！」

ようがあたる。痛い。

「不覚だああああああ！」

前龍ヶ崎の「おはな」は、おはなとも話せない。というかおはなをするべからず。

ん！「ばくべつ！」

頭を竹刀で殴られているような気がする。何故描写が曖昧なのか

と言つと、意識が朦朧として何がなんだかわからないのだ。

俺が「あびやびや」と呻いて、このまま龍ヶ崎に殺されるのか……と、悟つた刹那。何かがが壊れる音がして、いきなり男子トイレのドアが開いた。

奇跡だ。

「……な、」ととりあえず、一言言つてみる。

すると龍ヶ崎は竹刀を持つたままドアを開いた方をみて、何か言つた。

「姉様！」

……少女、だつた。

薄い茶色の長い腰まで届く髪はどこから差し込む日光の光をあびて更に美しく艶やかに輝いた。美しい、おつとりとした顔立ちをしている。こちらの様子を見た。

「黒姫の声がしたので、様子を見に来たのですよー。そうしたら、何か喧嘩しているようでしたので、私が鍵を開けましたー」「その細い小さい手で！？」

思わずつっこんだ。その小さい白い手が鍵をぶちこわしてドアを開けるのか？ 男でも無理だぞ……。おつとりとした喋り方をしているが、まさかそんな彼女にそのような力があるとは。

「黒姫、やめましょう。転入早々、見苦しいですよー」「す、すみません」

黒姫は俺の首元に突きつけていた竹刀を下ろす。

それを見て安心した少女は俺の姿を見た。視線変更。

「はじめましてー、この度転校してきた龍ヶ崎白姫」と申します、以後、お見知りおきを

「あ、はー」

「こちらの男子は、私の弟、龍ヶ崎黒姫ですー。多分H.Rでもう自己紹介をしたと思いますがー……一応、私の弟ですのでー」「はー、はー」

「では、私はこのへんで失礼しますねー。茶道部に入部しようと思つてるので、先生にご挨拶しなければいけないのです。では、喧嘩せずにー」 ドアを閉めて、白姫さんは立ち去つていった。

うーん、実に美しい方だ。

黒姫はおずおずとしながら俺を見た。「……すまない。これ以上は、何もしない。姉様にああ言われてしまつた。姉様の言つことは絶対だからな……」

そう言つて、龍ヶ崎は一步歩いて戻つとした。  
が。

「龍ヶ崎、何か、落ちたぞ?」

こんにちは。駿河です。

今回は、転校生のお話をお送りします。黒姫と白姫です。  
そうやつ、そういうば、とある友達に「作家風にあとがきをかい  
てみてー」と言わされたので（リクエストなのか？）、書いてみます。  
それでは、私の末期についてお話したいと思います。

とある友達とは別に、男子の友達もまあまあ沢山いるのですが、  
そのうちの男子とほのぼのと外を見ていました。深い意味はないで  
す。当たり前です！

雨がさつきまでふっていたのですが、もう大分止んでいました。  
そこでその男子が、

名も無き男子「雨止んでるから外でよつかな」

駿河「え、ええつ！？」

名も無き男子「え、何？」

駿河「今ヤンデレって聞こえた！」

名も無き男子「……避け！」

そんなんかんじです。実につまらない話ですが、それと同時に実に  
私の腐っている『腐度』を物語っています。

では亜夕のお話です。

亜夕のお話と書いても、亜夕のモデルのお話です。

亜夕にはモデルがいて、まあとも私が溺愛している可愛らしこ

ショタなのです。可愛いです。わーい、私変態！

駿河 「ショタは、素晴らしい」

亜夕モデル 「ショタってなに？」

駿河 「え。しらないの？」

知らなくて当たり前です。

その後、ちゃんと説明してあげました。

亜夕モデル 「へえ、そうなんだ。まあ、俺は可愛いし当然と言つたところか」

駿河 「そんなナルシストなどいつも愛してるー。」

亜夕に似ています。

ちなみに、亜夕モデルにこの間消しゴムを借りました。筆記用具を忘れたので。やつしたら、消しゴムに何か書いてあつたのです…

「ん、これは」

発見してしまいました。なんと亜夕モデルの消しゴムには「神」という単語が記されてありました。

駿河 「ねえ、この、神って何？」

亜夕モデル 「神だから」

駿河 「へ？」

亜夕モデル 「俺が神なのー！」

駿河 「あ、ああ！ ショタ！」

意味がわからないです。では、今後あとがきにて彼の話をするとときは彼の名前は神消しゴムにしておきますね。

謝辞です。

ここまでスクロールしてくださった方、ありがとうございました

！ そして一文字一文字丁寧に読んでくださった方も居たら光栄です。誤字脱字の報告も随时受け付けております。日本語のおかしい

ところとかの指摘も。

次回は黒姫の謎に迫っていきます。  
ではー！

「な、ななな」

龍ヶ崎が口をパクパクさせてるので、仕方なく俺が拾つてやることにした。そうじやないと汚れちまう。仮にも此処はあの、ほら、男子が用を足す場ですから。

落ちてんのは……、「ん、同人誌?」同人誌だつた。アニメは大抵理解しているがオタクという程でもないという曖昧な俺は、同人誌の表紙のキャラクターを知っていた。表紙に描かれているのはこまみに一人で、どちらとも女キャラクター。白亜のような典型的の口りである。

「百合?」

「うぎやあ！ やめて！ 拾わなくていいから！」

急に口調が変わり、龍ヶ崎はあたふたしだした。

手をバタつかせている龍ヶ崎から、また何かが落ちた。

「む、これは……あのアニメのフイギュアか。イベントでしか手に入らないものなんじやないか？ む、また落ちたぞ。こつちは同人のグッズ、」「わああ！ もう、もうやめい！ 拾わなくていいし！ ぶつちやけ俺そういう無理矢理人の拾つて返すフリして人のモノちら見する人嫌いだから！」「ふむ、口調が変わつてますな。日本語が曖昧だぞ」「だあああああうるさい！ 返せ！」

んつ、と、掌を俺に差し出してよこせサインを出してきた。俺は百合ものの同人誌とフィギュアと同人グッズを返す。

「お前、アツチ系の奴だつたのか」

「……」

キッパリと言うと龍ヶ崎ま黙りこくつてしまつた。「ごめん」

「い、いや、別にいいのだ。龍ヶ崎の不覚だつた。ちなみにそれは龍ヶ崎の同人誌だ。同人グッズも龍ヶ崎のものだ」

「ふいと、すねたようにそっぽを無垢龍ヶ崎はそう言つた。自分

の、同人誌？ そりやあ自分の同人誌だろうに。

「これは自分で作ったものなのだ。貴様にはわからないだろうが龍ヶ崎はそこそこ売れている同人サークルに所属しているのだぞ」

「……まあ、それはわかった。だけどなんで学校にそんなモン持つてきてんだよ」

「悪いか？」

「悪くないですすみません」

ものすごい顔で睨まれたら謝るしかない。すみません。

ふう、と何事も無かつたかのように俺は立ち上がり、黒姫を見る。

「……わーお、」なんたる暗い顔。  
秘密がバレてしまつた事を非常に氣にしているらしく、ドンヨリとしていた。下に俯いている様子は今にも地面にの字を書きながら「どうせどうせ……」と言いつつも予感が漂う。そんな黒姫に近寄り、声をかけてやるうとする。が、

「この事を誰にも言つなよ！ 言つたらお前はあの世にきになる！  
水川白亜や大神亞夕に言つよつた事をしたら尚更だ。命は無いと思え。あ、あと、姉上にもあまり言つてほしくない」

姉上。黒姫の姉とは、龍ヶ崎白姫だ。あのロングヘアのべっぴんさんである。優しい笑顔を振りまく、茶道部か華道部か忘れたが

『いかにも』ああいうお方だ。いや俺は一回しか見てないけど。

「姉さんって、双子の龍ヶ崎白姫だろ？ ……姉弟のくせにあの事言つてないのか？」

すると黒姫は顎をゆつくり引いて、

「当たり前だ。お前、姉上を見くびつてはいなか？ 姉上は真剣でまがつた物が嫌いなのだ。この俺、龍ヶ崎がアニメや漫画や同人誌などといういかがわしい物を好きだと知つたら……龍ヶ崎はあの世逝きになる。それが木刀や竹刀で殺される」

そんなに恐ろしい人なのか。

「姉上は剣道、柔道、空手、華道、茶道、フエンシング、ボクシング、……まあエトセトラにしておくが、とても有力な方なのだ。姉上が曲がつた事が大嫌いな為にバレてはいけないという理由もあるが、それだけではない。有力で、龍ヶ崎が慕うべく姉上……実際尊敬もしているし、龍ヶ崎は姉上に憧れている。だから姉上を裏切るような事はしたくない」

もう既に裏切っていると思うんだが。

「だから姉上には言わないでくれ！ 頼む！ ロリとショタにも嫌われたくないんだ！」

「いや、ロリガールとショタボーイとはお前あまり交流がないだろうし、」「何言つてるんだ。第一印象が大切なんだぞ。第一印象で全てが変わる。それ龍ヶ崎は大神亜夕、いや大神亜夕様に一生ついていきたいと思ってるのだ。あっち系の意味ではなくてだな」黒姫は目を輝かせながら力説を続ける。「僕<sup>しもべ</sup>として扱われてもいい、龍ヶ崎はおのれのそばに居たいのだ。そしてお前より上だという事を証明したい」

ついに黒姫は俺の襟をつかみ、顔をグイッと寄せる。唾を大いに飛ばしながら更に力説。

「お前が二人をいじめていないという事はわかつた。だがしかし、お前はこれから龍ヶ崎の良きライバルとなるだろ？」「えつと、言つてる事がよくわからないのだが……」

「ということでお前と龍ヶ崎はこれから勝負するのだ！ ふはは、当然龍ヶ崎の勝利に決まっているだろうがな、お前が良きライバルになつたのなら仕方がない。明日の朝からが勝負だ」

いやいやまでまで、何故そうなつてるんだ。

一度整理しようとして、俺は目を輝かせている黒姫から目線をそらす。そして脳内で今まで在つた事を整理する。

えつと、黒姫の『あのこと』を龍ヶ崎白姫にバラしてはいけない（もしバラしたら簡単に言えば死刑）、ロリとショタのお二人様にもそのことをいつてはいけない（こちらも二人にいつたら死刑になる）、あと何故か俺たちは良きライバルになつているから明日の朝から勝負を開始する……

ちょっと待て。

俺は、黒姫が俺の襟を掴む手を無理矢理外す。以外とパツと黒姫の手は外れた。そのまま黒姫を見て、問いかける。

「勝負つて何をするんだ」

すると黒姫は待つてましたと言ひそうな体制で（即ち腰に手をあてて「えつへん！」と胸をそらすポーズ）俺を見てブイサインをする。指が細い。

「待つてました！」やつぱり言つた。

「内容は簡単だ。バカなお前でもすぐわかるだろ？。要するに、水川白亜と大神亜夕を『慕え巴』いいのだ。それで、実際どつちが役にたつたか本人に訊く。本人に訊いて、『君が役にたつた』などと答えれば役にたつたほうが勝利。負けたほうは切腹を命ずる」

「待て！ なんでお前の発言はこう危険なんだ！ 切腹つづーのはなあ、結構前に禁止が出てるし法律でもやつちやいけない事になつてんだよ！ 切腹つづーのは、自殺とワケが違う。とにかく切腹はダメだ」

黒姫は頬をふくらませた。

「仕方がない。今回だけだからな」

何が。

「では、明日の朝からが勝負だ。負けたほうの罰は龍ヶ崎が考えておく。ではまた明日会おつ。さらばだ」

何処のヒーローだ。

黒姫はキリリとしたいつものかっこいい顔をして男子トイレから出ていった。そういうやあ此処は男子トイレだつたんだつけか……。

黒姫が出ていつたので、俺も帰る事にした。男子トイレの洋式便所のドアの前に物悲しく置かれたカバンを哀れに思わなかつたが、カバンを持ち、とりあえず外に出る。

あ、家の鍵教室に置きっぱなしあもしない。きっと机の中だ。

ふと思つたのは、俺が鍵をポケットにしまつて教室を出た記憶が無いからである。今日は母さんが家に居ないし、取りにいかなければいけない。そうしないと家に入れないまま一人でドアの前にポンと……それはダメだ。ゲームも勉強もできないから。

「取りにいくかあ」

溜息をついてから、男子トイレ付近の教室に向かう。

あつ、もうすぐで200000アクセスだ……！　全角数字にする  
とすこくスペースを使つた気分になります。駿河は心が狭いのです。  
改めてこんにちは、駿河です。今回は黒姫編が始まつたというか  
……あ、黒姫編ではなくて『龍ヶ崎編』かもです。予告編としては、  
白姫のお話です、次回は。

予想がついている方がいるかもしれません、意外な彼女の秘密  
が明らかになります。

そして冒頭で咳いてみましたが、アクセス数が20000突破で  
す。スペースを使つている氣がするのですが、あえて全角数字でいき  
ます。20000です！

此處、小説家になろう様でお書きになられている私よりもずっと  
上手くて、小説が人気の方は「200000くらいで喜んでるんじや  
ねえよ素人が」というかんじかもしれません、とても嬉しいので  
す。何せブログよりアクセス数が高いですから。当たり前ですけど  
も（ちなみにブログは去年の8月に始め、この小説は11月に始め  
ました。小説の方がアクセス数高いだなんてなんたる幸せ）。ちな  
みにブログはまだまだ5000です。

20000アクセス突破できたのはクリックだけでもしてくれた  
方々と、そしてこんな駄文でも読んでくださつた方々のおかげです。  
そしてこの素敵なオンライン小説サイト、小説家になろう様のおか  
げでもあります。ありがとうございます。

最後に、ここまでスクロールしてくださつたあなた（もしいたら）  
ありがとうございました。次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4779f/>

---

ロリショタ！～私立萌葱学園萌えルート～

2010年10月8日14時39分発行